祝福の泉



エイドリアン・エベンス
ケビンJ.マリンズ

祝福の泉

エイドリアン・エベンス

ケビン J.マリンズ

印刷元

fatheroflove.info

２０２０年５月

目次

父の喜びという祝福.....**Error! Bookmark not defined.**
罪による子としての身分の喪失..... 9
犠牲なくして安息日は成り立たない.....**Error! Bookmark not defined.**2
律法に示される福音.....**Error! Bookmark not defined.**
泉のように流れて..... 20
潤いの季節.....**Error! Bookmark not defined.**
祝福の広がり .....**Error! Bookmark not defined.**
歴史の証言..... 31
安息日をより深く .....**Error! Bookmark not defined.**
小さな角..... 42
真夜中の叫び..... 53
暗闇からの召し出し..... 58
祝福.....**Error! Bookmark not defined.**
結論..... 63

父の喜びという祝福

> 詩篇 33 篇 8～9 節　全地は主を恐れ、世に住むすべての者は主を恐れかしこめ。主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである。

あの建築の名匠が語りかけるだけで、この世界が形づくられていく様子を、天使たちと共に見ていたとしたら、どれほど素晴らしかったでしょうか。さらに驚くべきことがあります。この建築の名匠は、「すべてのものをイエス・キリストによって創造された」のです。（エペソへの手紙 3 章 9 節）。ここにその事実を示すさらなる証言があります。

> ヨハネによる福音書 1 章 1～3 節、14 節　初めに言があった。**言は神と共にあった。言は神であった。**この言は初めに神と共にあった。**すべてのものは、これによってできた。**できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった…**そして言は肉体となり**、わたしたちのうちに宿って（わたしたちはその栄光を見た、それは父のひとりの子としての栄光であって）、めぐみとまこととに満ちていた。

> コロサイ人への手紙 1 章 12～17 節　父なる神に、感謝することである…神は、私たちをやみの力から救い出して、**その愛する御子**の支配下に移して下さった。私たちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆるしを受けているのである。御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、**みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。**

> ヘブライ人への手紙 1 章 1～2 節　神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、**この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。**

神の御子は、神の言葉そのものであり、神の思いが聞こえる形となった方であります。聖書は、「彼の名は、神の言葉と呼ばれた」（ヨハネの黙示録 19 章 13 節）と語っています。父なる神のすべての創造の力は、世界を言葉で作り出すために御子に与えられました。

> マタイによる福音書 28 章 18 節　イエスは彼らに近づいてきて言われた、**「私は、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。」**

> ヨハネの福音書 8 章 28 節　私は自分からは何もせず、ただ父が教えて下さったままを話していた。

キリストが父の言葉を語られると、その言葉どおりに世界が存在し始めました。 草や木々、花々が、その御言葉によって大地から姿を現したとき、 父は御子の方へ向き、告げられました。 「これは良い、わが子よ。」箴言の書には、そのとき御子が語った言葉が記録されています。

> 箴言 8 章 22～30 節　主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの**初め**として、私を造られた（ヨハネ 1:1 参照）。いにしえ、地のなかった時、初めに、**私は立てられた**（ヨハネ 8:42 参照）。まだ海もなく、また大いなる水の泉もなかった時、私はすでに生れ、山もまだ定められず、丘もまだなかった時、私はすでに生れた（ヘブライ人への手紙 1 章 5 節参照）。すなわち神がまだ地をも野をも、地のちりのもとをも造られなかった時である。 主が天を造り、海のおもてに、大空を張られたとき、私はそこにあった。主が上に空を堅く立たせ、淵の泉をつよく定め、海にその限界をたて、水にその岸を越えないようにし、また地の基を定められたとき、私は、そのかたわらにあって、**名匠となり**（ヨハネ 1:1 参照）、**日々に喜び、常にその前に楽しんだ。**

この創造の一日一日を通して、神の御子は、父が自分をお喜びになっていることを感じていました。御子は、創造のわざを通して、父の祝福を心から喜びました。日々が過ぎるにつれて、父と御子の喜びと楽しみは増していきました。やがて、アダムとエバが、自分たちを取り囲む創造物に驚嘆して立ち尽くす姿を見たとき、父と御子は、惜しみ

なく与えたこの贈り物を前に、深い喜びを感じられました。 彼らは、互いにアガペ（無私の）愛のうちに共に喜ばれました。そしてついに、安息日が訪れました。 父は創造の過程を見渡し、山々、谷、流れゆく川、地を歩き回るすべての生き物をご覧になり、喜びをもって御子に語りかけられました。

あなたは私の愛する子、私が喜ぶ者です。

この日、神の御子は、「安息日の主」として認められ（ルカによる福音書 6 章 5 節）父からの祝福されました。至高の霊が御子に宿り、息を吹き返されました。

> 出エジプト記 31 章 17 節　...主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、いこわれたからである。

ヘブライ語で*息を吹き返した*という言葉は、息を吹きかけるという意味を含んでいます。父が御子に息を吹きかけることは、父が御子を喜ばれる表れでした。御子は、父がすべてのものを自分に与えてくださったことを心から崇め、礼拝をもって父に応えられました。

> ヨハネによる福音書 3 章 35 節　父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。

> ヨハネによる福音書 8 章 29 節　私をつかわされたかたは、私と一緒におられる。**私は、いつも神のみこころにかなうことをしている**から、私をひとり置きざりになさることはない。

> ヨハネによる福音書 17 章 1～7 節　イエスはこれらのことを語り終えると、天を見あげて言われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。あなたは、**子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため**、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。**私は、私にさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。**父よ、**世が造られる前に、私がみそばで持っていた栄光**で、今、御前で私を輝かせて下さい。私は、あなたが世から選んで私に賜わった人々に、御名（品性）をあらわしました。彼ら

はあなたのものでありましたが、**私に下さいました**。そして、彼らはあなたの言葉を守りました。**いま彼らは、私に賜わったものはすべて、あなたから出たものであることを知りました。**

神が安息日に置かれた祝福は、私たちが毎週思い起こすもので、まさに、御子が父の喜びを通して経験した息を吹き返すことです。

創世記 2 章 3 節　神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。

創造の週を終えたとき、父が御子に抱かれた喜びを記念して、七日ごとの安息日には、父が御子に息を吹きかけられます。そして、キリストの内にある者たちは、この祝福を共に受けます。私たちは、イエス・キリストを通して この祝福の相続人とされるのです。

エペソ人への手紙 1 章 3～5 節　ほむべきかな、私たちの主イエス・キリストの父なる神。**神はキリストにあって、天上で霊のもろもろの祝福をもって、私たちを祝福し、みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあって私たちを選び**、私たちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである。

キリストにあって私たちが受けることのできる最大の霊的な祝福は、父なる神に愛されていることを知ることです。信仰によって、私たちは父が喜びをもって御子の肩に腕を回し、 父としての愛情を込めて御子にキスし、「あなたは私の子。私はあなたを喜んでいる。」と語っているのを見るのです。

ヨハネによる福音書 1 章 8 節　神を見た者はまだひとりもいない。**ただ父のふところにいるひとり子なる神だけ**が、*神*をあらわしたのである。

神の御子は、この祝福の言葉を父から受けたとき、完全で、欠けることのない安らぎ以外に何を経験できるでしょうか。父のふところに抱かれ、 確実に自分が**父**に愛され喜ばれていると知ること以上に、 望むべきものがあるでしょうか。

これは、福音が私たちを導き入れる完成したわざです。

> ヘブライ人への手紙 4 章 2～4 節　私たちにも、昔のイスラエルの人たちと同じように福音が伝えられているのである。...私たちが信じている者は、安息に入ることができる。...みわざは世の初めに、でき上がっていた。**聖書のある箇所で、七日目のことについて、「神は、七日目にすべてのわざをやめて休まれた」と言われた。**

創造のわざと、あがないのわざは、同じなのです。どちらも、あなたを父の腕の中へと導き、抱きしめられて、完全な安らぎと喜びを体験させてくれるからです。この体験は、主イエス・キリストを通して、私たち一人ひとりに開かれています。そして、七日ごとの安息日が巡ってくるたびに、 私たちは、世界の創造からキリストが体験したあの安らぎへと入ることができのです。安息日ごとに、父が御子を喜ばれたその喜びを、 私たちはより深く味わうことができます。イエスは私たちの人間性、つまり「肉と血」（ヘブル 2 章 14 節）を共有してくださいました。ヨルダンでイエスに語られた言葉、「これは私の愛する子、私が喜んでいる子」は、すべての人類を包み込む言葉です。神はイエスに語られたが、それは私たちの代表として語られたのです。私たちが罪や弱さを抱えていても、神は私たちを価値のない者として捨て去られることはありません。聖書はこう語っています、「神は、愛する御子のうちにある私たちを受け入れてくださった」。（エペソ人への手紙 1 章 6 節）。

これは、安息日に込められた祝福です。それは、キリストを通して、私たちと父なる神との間にある愛の絆が新たにされ、潤される体験です。七日ごとの安息日が訪れるたびに、父の御名（御品性）が、その御口からの息吹によって、 私たちの魂にいっそう深く刻みつけられていきます。安息日が神の子どもたちにとって、どれほど貴い贈り物でしょう。ああ、千の舌があれば、わが偉大な贖い主を讃える歌が歌えるのに。私はキリストの中で父の喜びとつながれています。私は、愛する御子のうちに受け入れられているのです。

罪による子としての身分の喪失

これは、堕落する前のアダムが置かれていた状態でした。彼は、神の御子を通して父なる神の愛の確信の内に生きていました…破壊者がその間に割り込んでくるまでは。サタンは、神の御子に従うことを拒み、それによって、彼は父の喜びの外へと自らを置くことになりました。父が喜ばれるその霊は、御子を通してのみ流れ出るからです。もし私たちが父の祝福と喜びを望むなら、キリスト・イエスのうちにある泉から飲まなければなりません。サタンがキリストから離れたとき、彼は同時に、自らの神の子としての身分からも離れました。子となるためには、御子を見つめる必要があります。見つめることによって私たちは変えられるのです。サタンは、自ら神の子であることを拒み、父の刻印を心から消し去り、自分自身を礼拝するする謎めいた心に置き換え始めました。

> イザヤ書 14 章 12～14 節　ああ、ルシファーよ、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。あなたはさきに心のうちに言った、「私は天にのぼり、私の王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、 雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう」。

もしルシファーが、神の御子に従い続けていたなら、彼はキリストを通して父の喜びを受け続けることができたかもしれません。 御子の霊を通して、神の子としてあり続けることもできたかもしれません。しかし、悲しいことに彼はこれを拒み、その立場から踏み出すことで、価値のない闇の中へと陥りました。エゼキエル書 28 章 12～15 節は、象徴的にルシファーの堕落を描いています。彼は「知恵に満ち、美しさの極み」であり、「神の園エデンにいた」完全な状態にあったのです。彼を覆っていた「あらゆる尊い宝石」は、父の尊い正義の品性を象徴していました。彼の澄みわたる声と賛美の楽器は、造り主への礼拝の音として宇宙に響き渡っていました。彼は「火の石の間を歩き回っていた」と言われており、 それは生命の現実を支える神の愛の律法と 完全に調和していたことを意味します（申命記 33 章 2 節）。彼は創造されたその日から「不義」が見るかるまで完全でした。 彼は「火の

石」から離れ、造り主への賛美からも離れていきました。 そして、キリストのような品性を象徴する すべての尊い宝石の覆いを、彼はその扉の前に置き去りにしました。

こうして彼が新たに身を置いた状態には、もはや幸福というものが一つも残っていませんでした。かつて彼と彼に同調する者たちを照らしていた光は、今や陰鬱で絶望的になりました。彼が最も高き者を超えようとした彼の利己的な願望は、自分自身の頭上に崩れ落ちてきました。自己非難と罪悪感が彼にのしかかり、深い悲しみを与えました。

> イザヤ書 57 章 20〜21 節　しかし悪しき者は波の荒い海のようだ。静まることができないで、その水はついに泥と汚物とを出す。わが神は言われる、「よこしまな者には平安がない」と。

サタンの陰鬱さと絶望は、アダムとエバが食べてはならないと命じられていた実を食べたときに、彼らの内に受け継がれてしまいました。この陰鬱さと無価値感は、自らのアイデンティティを失ったことから直接生じたものです。それは、父が御子に注がれる喜びから離れたことで失われたのです。それは、自ら孤児となってしまったことによる悲しみでした。そして、この同じ喪失感と悲しみは、今日もなお人々の心に存在しています。

> 御ヨハネの手紙 2 章 23 節　御子を否定する者は父を持たない。

人が自分にはほとんど価値がない、あるいはまったく価値がないと感じるとき、それは、自滅的な無価値感として現れることは理解しやすいでしょう。罪とは、 私たちに命を与えてくださった方が自分を価値ある者として見ておられないという信念が形となって現れたものにほかならないのです。この思いを、蛇はエデンの園でほのめかしたのです。

> 創世記 3 章 5 節　これを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです。

サタンは、神がアダムとエバにとって何か祝福となるものを隠しているかのように示唆しました。このような考えから、神は本当には自分たちを愛していないのではないかと思うようになりました。そして、

神は私を本当に愛していないという思いが心に宿ると罪が生まれ、「罪が成熟すると、死を生み出す（ヤコブの手紙 1 章 15 節）」のです。

罪の解決法は、私たちのことを喜んでおられる父なる神の愛が明らかにされることです。この愛が最も完全に現された場所は、エデンの最初の安息日に、 神が御子に示された喜びの中にあります。ゆえに安息日は、 父なる神の喜びに満ちた御霊が私たちの心に働きかけ、 父が本当に私たちを愛し、大切にしておられることを思い起こさせるための手段なのです。この日、私たちはキリストを通して父の息吹を受け、それによって、私たちは父の愛を理解するために清められます。

私たちが父の完全な祝福を受けることができるのは、キリストを通してのみです。そして、キリストの主権が安息日にあるので、父の完全な祝福を受ける道もまた、安息日を通してのみ開かれていると言えます。だからこそ安息日は、 私たちの神が与えてくださった聖別のしるしであり、奇跡なのです。

> エゼキエル書 20 章 12 節　私はまた彼らに安息日を与えて、私と彼らとの間のしるしとした。これは主なる私が彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。

私たちが神の息子や娘として生きることは、キリストとサタンの戦いの鍵なのです。サタンがキリストにこう言った時、それを明らかにしました。

> マタイによる福音書 4 章 3 節　…**もしあなたが神の子であるなら**、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい。

サタンはキリストに、神の子としての身分と、その定義に疑いを投げかけました。父なる神は四十日前、ヨルダン川でキリストに向かって、あなたは私の子であると宣言されました。では、キリストは父の言葉を信じたのでしょうか。 それとも、自らの力によってその身分を**証明**しようとしたのでしょうか。キリストは、父の言葉の内に安らぎ、神は本当に自分の父であることを信仰によって信じました （マタイによる福音書 4 章 4 節）。もし、自分が神の子であることを証明しようとしたなら、 それは、神の言葉を信仰によって受け入れていないことを

意味するでしょう。このテーマについては、fatheroflove.info の書籍「*Identity Wars*」を参照してください。

神の御子が創造の最初の安息日に父の祝福のしるしを受けたように、私たちもまた、安息日を通して 神の子として完全に回復され、しるしを受けます。

犠牲なくして安息日は成り立たない

もしアダムとその子供たちが、毎週の安息日に父の祝福を受けに来ていたなら、父が子供たちに抱く喜びの回復の過程は、どれほど簡単だったことでしょう。しかし、それは不可能でした。なぜなら、サタンが神の子としての立場から離れたとき、彼はキリストの内にある子としての霊を拒んだからです。実際のところ、サタンは最初から 神の御子を滅ぼしたいと願っていたのです。

> ヨハネによる福音書 8 章 44 節　あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。

アダムがサタンに身をゆだねたとき、 彼は孤児の霊に支配されるようになりました。それは、キリストを憎み、子として生きるのではなく、神と対等であることを求める霊でした。サタンは初めからこう言っていたのです。

> イザヤ書 14 章 14 節　私は雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう。

私たちが父の喜びを受け取ることができないのは、自分の心が本来、神の御子と対立していることを認めようとしないからです。神は確かに私たちを愛しておられますが、その愛を受け取るためには、子としての立場に戻る必要があります。ゆえに、安息日の休みに入るためには、 私たちの本性が孤児の心によって 神の御子を拒んでしまうことを認めなければなりません。いつも一番になりたいという願望、他人よ

り優れていることを証明しようとする努力、自分の力を示して評価される理由にしようとする行動は、すべて神の御子を滅ぼそうとする試みへとつながっていく心の動きです。

> エレミヤ書9章23～24節　**主**はこう言われる、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、私を知っていること、私が**主**であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。私はこれらの事を喜ぶ。」と。

自分の知恵や力、富を誇るということは、父を知ることを誇りとしていないということです。それは、すべてのものが父から来るという事実を 認めていないということでもあります。神の御子は、ご自身が持っておられるすべてが父から与えられたものであることを、常に認めて生きています。

> ヨハネによる福音書5章19節　さて、イエスは答えて言われた、よくよくあなたがたに言っておく。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。

> ヨハネの福音書 3 章 34～35 節　神がお遣わしになった方は神の言葉を話される。**神は制限された測り方で御霊をお与えになるのではない**からである。父は御子を愛しておられ、すべてのものをその手に委ねられた。（国際標準版）

したがって、御子の霊によって父のもとに来ない限り、私たちは父の喜びを受け取ることができないのです。そうするための唯一の方法は、私たちが本質的に神の子と戦ってきたことを認め、自分たちの態度や行動が、チャンスがあれば神の子を滅ぼしていたであろうものであることを理解することです。

私たちがこの事実を認める方法は、キリストが私たちのために死なれたことを告白することです。私たちの罪によって彼は傷つけられ、私たちの不義によって彼は打ち砕かれたこと（イザヤ書 53 章 5 節）を受け入れるとき、 父の聖所への扉が開かれ、 その祝福を受ける道が開か

れます。あらゆる自己中心的な思いは、神の御子を傷つけ、苦しめます。私たちは、イエスが二千年前に私たちのために苦しまれたという事実を受け入れるだけではいけません。「今日、もし彼の声を聞くなら、心をかたくなにしてはならない」（ヘブライ人への手紙 4 章 7 節）と聖書で語られています。*今日*も彼は傷つき、*今日*も私たちの自己中心によって苦しみ、 *今日*も彼は人々に蔑まれ、拒まれている（イザヤ書 53 章 3 節）。この現実に私たちの目が開かれたときに初めて、私たちは真の安息日の経験へと入ることができるのです。

ここでの重要な点は、**キリストの犠牲を自分の魂のためのものとして受け入れない限り、安息日の休みに入ることは不可能だということです。**彼の死は、 私たちがどのような心を彼に対して持っているかを示し、 その事実を悔い改めるかどうかの選択を与えてくれます。キリストを十字架にかけ、あからさま辱める一方で、キリストの内に安息を得ようとすることは誰にもできません。（ヘブル人への手紙6章6節）。したがって、私たちは主の前に手ぶらで現れることはできません （出出エジプト記 23 章 15 節）。私たちは、いけにえを持って来なければなりません。私たちのいけにえは、血を流す動物ではありません。それは、私たちの内にある自己中心性を認め、それゆえに堕落した本性がキリストに向ける憎しみを認めるうえでの悔い改めた心と打ち砕かれた霊です（詩篇 51 篇 16～17 節）。犠牲と安息日は、 常に結びついています。一方が、もう一方への入口を開きます。これらの真理を理解しなければ、 私たちは神の子としての立場を取り戻す戦いに 勝利することはできません。自分たちが罪深い状態のままでは、私たちは神の御子を踏みにじっていることを受け入れない限り、 真の意味で神の子となることはできません。御子が私たちのために苦しまれたことを認めるまで、 私たちは子になることは出来ず、目的を失った孤児のままであり、 罪をやめることができません。なぜなら罪とは、息子や娘としての身分を失った証拠であり、父の真の愛の内に安息を見つけていない証拠だからです。

これらのことを踏まえると、安息日は罪における救いの希望の灯台となることが見えてきます。十字架にかけられた、傷ついた救い主を見ると、私たちのいかなる悪しき欲望が彼にどんな影響を与えたのかが

分かります。そのとき、私たちは悔い改めて神に向かい、キリストの祝福を受け、父が御子に抱いておられる甘美な喜びを味わうことができるのです。その瞬間、 私たちは愛される者の内に受け入れられ、キリストが持つ全ての霊的祝福が信仰によって私たちのものとなります。この神の子としての立場において、私たちは神の愛を疑わなくなるので罪をやめ、父なる神がいつも私たちを愛し、大切にし、最善だけを行ってくださることを知って、 完全な喜びの内に安らぐのです。

なんと尊い思いでしょう。キリストとその安息日に、私たちは本当に素晴らしい慰めを得ることができるのです。安息日に、 キリストの霊が神の御座から注がれ、父の喜びを携え、心を開いて彼を認めようとするすべての者のうちに入り込もうとしているのが分かります。キリストの犠牲を受け入れ、その戒めを守る人々は、安息日と結びつけられ、 信仰によって 神の息子または娘としてのあらゆる豊かさの中へ入るのです。安息日ごとに、私達は父が御子に抱いておられる喜びへと結びつけられます。御子の肩に置かれた父の腕は、私たちにも受け継がれます。安息日ごとに、御子が味わっておられる喜びと慰めを、 私たち自身が体験するのです。

こうして私たちは、福音の中心にある十字架と、律法の中心にある安息日が、 互いに出会い、父の喜びを私たちに解き放ってくださることを見ます。そのとき、私たちはこう叫ばずにはいられません。

> ヨハネの第一の手紙 3 章 1〜2 節　私たちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。私たちは、すでに神の子なのである。...愛する者たちよ。私たちは今や神の子である。しかし、私たちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、私たちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。
>
> ローマ人への手紙 8 章 16 節　御霊みずから、私たちの霊と共に、私たちが神の子であることをあかしして下さる。

福音とは、父がいつどのように私たちの元に来てくださり、私たちがどれだけ大切で、どれほど愛されているかを教えてくださるかの啓示です。

律法に示される福音

初めから、主は族長たちに、父の喜びがキリストに示されるときに訪れる主からの癒しの時期を明らかにしています。定められた時に、族長たちが信仰によって小羊をささげると、彼らは父の喜びを宿すキリストの霊と結びつき、その霊に導かれることによって、彼らは自分が神の子として受け入れられていることを確認されたのです。

> ローマ人への手紙 8 章 14 節　すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である。
>
> ヨハネによる福音書 1 章 12 節　しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

サタンはすぐに、神がご自分の子供たちを祝福するために定められた時やいけにえを歪めようと動きました。イスラエルがエジプトから出た後、キリストは、エジプトで失われてしまっていた主の戒め・律法・定めを通して モーセに完全な福音の説明を取り戻しました。聖書はアブラハムについて、次のように語っています。

> 創世記 26 章 5 節　…アブラハムが私の言葉にしたがって私のさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守ったからである。

アブラハムは、神がアブラハムに永遠の義の福音を信仰によって伝えたられたので（ガラテヤ人への手紙 3 章 7～9 節）、神の「戒め、定め、律法」と 調和して歩んでいました。

モーセは四十日四十夜、神の律法を見つめ続けた後、山を降りてきました。 そのとき、彼の顔は 律法のうちに輝く福音の栄光によって光を放っていました （出エジプト記 34 章 29～35 節）。モーセの顔に輝いた光は、象徴的なものではなく、実際の光でした。その光のまばゆさのために、イスラエルの人々は モーセに顔を覆うよう求めたほどでした。その光は、 モーセが信仰によって カルバリーを見つめたことや、父がどのように安息日と十字架を通してご自分の子供たちをご自身と結びつけられたのかを見たことから来ていたのです。

最初の十戒がモーセによって砕かれる前に、主はすでに安息日を創造と結びつけておられました。

> 出エジプト記 20 章 11 節　**主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って**、七日目に休まれた。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

その後、 新しい十戒が作られたとき、神は安息日を束縛からの解放とも結びつけられました。

> 申命記 5 章 15 節　あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、**主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出された**ことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである。

これら二つの聖句から、安息日が、私たちの存在の源や救いの源へと導くための通路であることがわかります。安息日は、初めからそうであったように、 今日の福音の一部でもあります。

> ヘブライ人への手紙 4 章 10～11 節　神の安息に入った者は、神がみわざをやめて休まれたように、自分もわざを休んだからである。したがって、私たちは、この安息に入るように努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にならって、落ちて行く者が出るかもしれない。

モーセには、 国のためにいけにえを捧げるべき具体的な時を与えられていました。いけにえと時は、どちらもとても重要でした。いけにえが捧げられるその時こそ、父が創造の最初の安息日に御子に祝福を注がれたように、父の祝福が注がれるための通路となりました。

律法によれば、いつ いけにえが捧げられるべきだったのか見てみましょう。

> 歴代誌第一 23 章 30～31 節　また**朝**ごとに立って主に感謝し、賛美し、**夕**にもまたそのようにし、また**安息日**と**新月**と祭日に、主にもろもろの燔祭をささげるときは、絶えず主の前にその命じられた数にしたがって捧げなければならない。

歴代誌第二 8 章 12～13 節　ソロモンは廊の前に築いておいた主の祭壇の上で主に燔祭をささげた。すなわちモーセの命令に従って、**毎日定め**のようにささげ、**安息日**、**新月**および**年に三度の祭**、すなわち**無発酵パンの祭**、**七週の祭**、**仮庵の祭**にこれをささげた。

律法は、いけにえが捧げられたことを示している。

1. 朝
2. 夕
3. 安息日
4. 新月
5. 過越の祭り/無発酵パンの祭
6. 七週の祭り
7. 仮庵の祭

いけにえと安息日の間には、七という数の用いられ方に、美しい結びつきが存在していることがわかります。下の表では、年間の祭りの周期の終わりに、律法に記されているいくつかの追加の七を加えて示すことにします。

これらのいけにえの時期は、偶然に定められたものではなく、すべての主要な時間の区分に関連する安息日・七の原則を示すために、意図的に七という数字と結びつけられています。この原則は、日、週、月、そして年の中に それぞれ見られます。七日目は、 父が六日間の創造のわざを終えられたとき、御子を祝福された日です。六つの期間を通して働きが完成すると、 七番目の期間は、 振り返りの時間と、父の喜びを味わい、 自らが神の子であるという身分を新たに確認するための時となります。

安息日は、 私たちの創造と贖いの神のしるしであるために、神は私たちが七つずつ数えることを求められています。そうしなければ、六日で地を創造し、七日目に休まれた私たちの創造主であり、贖い主である方を忘れてしまうからです。

時間枠	出来事	六と七と休み	参考
7 時間目	日々のいけにえ	朝と夕方のいけにえの間は 6 時間。キリストが十字架の上で苦闘し、休んだ 6 時間。	マルコによる福音書 15:25; 15:34; 使徒言行録 3:1; 詩篇 141:2; 民数記 28:8
7 日目	安息日	6 日働いて、休む	出エジプト記 20:8-10
7 日間	無発酵パン祭	7 日間の無発酵	レビ記 23:6
7 週間と 1 日	七週祭	七週祭まで 7 週間数えて、休む	レビ記 23:15
7 月 7 つの月を数える	(7+1 days) ラッパ祭、 贖罪日、 仮庵の祭り（7+1 日）	6 か月数えて、7 月に 3 つの祭り	レビ記 23:24-39; イザヤ書 66:23, 列王記下 4:23; エゼキエル書 46:1
7 年目	土地の安息日	6 年数えて、7 年目は休む	レビ記 25:3
7×7 年間＋1	聖年	7×7 年を聖年まで数えて、休む	レビ記 25:8-10
7×1000 年	千年	1000 年を 6 回数えて、休む	ヨハネの黙示録 20:6

私たちの父なる神は、すべての時間の区分の中に、御子と御子を通して私たちに注がれる大きな愛を刻み込もうとしておられるのでしょうか。人間の身体には、三十兆もの細胞があり、およそ一万ほどの化学的働きを行っています。一つ一つの細胞には、一兆ビットもの情報（一千万冊の書物の文字に相当する量）が収められています。そして驚くべきことに、 これらの細胞は **七年**ごとにすべて入れ替わるのです。

> 鳥の卵はすべて、 産卵から孵化までの期間が**七日間**の完全な倍数となっている。ニワトリは **21** 日、一般的なアヒルは **28** 日、ノバリケンのアヒルは **35** 日、エンペラーペンギンは **49** 日、エミューは **56** 日、イヌワシやオジロワシは **35** 日、大型のフクロウは **28** 日、ヒクイドリは **42** 日と、**いずれも七の倍数である。**人間の場合、月経周

期は正確に **28** 日（月の周期と同じ）であり、 胚の発達段階も **28** 日周期で進む。人間の通常の妊娠期間は 28 日 × 10 期 = **280** 日（これはちょうど 40 週に相当）し、40 という数字は**人間の妊娠週数**であり、聖書でも繰り返し用いられる。哺乳類の妊娠期間も同様で、ネズミ **21** 日、猫 **56** 日、野ウサギ **28** 日、 犬 **63** 日、ライオン **98** 日、羊 **147** 日と、**すべて七の倍数である**。最初の骨髄細胞が現れるのはおよそ **49** 日目で、この日は科学的な発生記録の最終日として特別な意味が与えられている。この時、胚は **七**週齢となり、基本的に**完成した**とみなされる。また、 熱病や痛風、マラリアなどの発作は **7** 日・**14** 日・**21** 日の周期で現れ、「危険日」と呼ばれてきた。脈拍も七日ごとにわずかに遅くなると言われ、創造週の第七日の休みと歩調を合わせているかのようである。 平均脈拍は 1 分間に **70** 回である。「神は土のちりで人を形づくられた」（創世記 2:7）。科学は、人間の身体が一握りのちりに含まれる **14** の元素（7×2）と 同じ構成であることを示している。太陽光をプリズムに通すと**七**色が現れ、三つの原色と四つの補色から成る。既知の元素の周期表にも **七**つの周期レベルがある。これらの例からわかるように、神は自然界に**七のパターン**を定めておられたことがわかる。物質、エネルギー、時間、空間など自然界のすべては 主なる神によって設計され、定められたのである。したがって、私たちの聖なる聖書は、真の科学における誤りなき"主の教科書"であると確信してよいのである。

(*TheHiddenLighthouse.blogspot.com*)

私たちは、 生命の形成においても、 いくつかの病の経過においても、 そして自然界の多くの営みにおいても、七という数が密接に結びついていることを見ています。だから、この七という数が、 神が礼拝のために定められた時と親密に結びついているという理解できます。

泉のように流れて

出エジプト記には、いけにえの時に何が起こるかを、より深く理解させてくれる美しい実例が記されています。

> 出エジプト記 17 章 3〜6 節　民はその所で水にかわき、モーセにつぶやいて言った、「あなたはなぜ私たちをエジプトから導き出して、私たちを、子供や家畜と一緒に、かわきによって死なせようとするのですか」。このときモーセは主に叫んで言った、「私はこの民をどうすればよいのでしょう。彼らは、今にも、私を石で打ち殺そうとしています」。主はモーセに言われた、「あなたは民の前に進み行き、イスラエルの長老たちを伴い、あなたがナイル川を打った、つえを手に取って行きなさい。 見よ、私はホレブの岩の上であなたの前に立つであろう。**あなたは岩を打ちなさい。水がそれから出て**、民はそれを飲むことができる」。モーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのように行った。

モーセが打った岩は、私たちのために殺されたキリストの象徴なのです。

> コリント人への第一の手紙 10 章 4 節　みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、**この岩はキリストにほかならない**。

> マタイによる福音書 26 章 31 節　そのとき、イエスは弟子たちに言われた、「今夜、あなたがたは皆私につまずくであろう。「**私は羊飼を打つ**。そして、羊の群れは散らされるであろう」と、書いてあるからである。

打たれた岩の象徴を通して、私たちは、その岩が打たれた瞬間に流れ出る命の水を見ます。そして、この同じ象徴は、十字架におけるキリストの死の中にも見ることができます。

> ヨハネによる福音書 19 章 34 節　しかし、ひとりの兵卒がやりでその脇を突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。

ほふられた小羊の象徴と、打たれた岩の象徴とが結び合わされることによって、贖いの命を与える流れは、これらすべての七の節目において注ぎ出されます。朝、目覚めるときにキリストの犠牲を認めるなら、その生ける流れは私たちのために開かれ、私たちはキリストを通して父の喜びの息吹を受けるのです。イエスは「第三の時」（午前九時）に十字架につけられました（マルコによる福音書 15 章 25 節）。それ

から六時間後の「第九の時」（午後三時）は、夕方のいけにえがささげられる時でした。ちょうどその時刻に、イエスは「大声で叫び」、息を引き取られたのです（マルコによる福音書 15 章 33〜37 節）。使徒たちは、第九時を祈りの時として記しました。

> 使徒行伝 3 章 1 節　ペトロとヨハネが、**午後三時**の祈りの時に神殿に上って行った。

キリストの犠牲を認めて立ち止まり思い出す人たちには、泉が開かれます。そして私たちは、父が私たちに注いでくださる愛の流れの中を泳ぐことができるのです。

この流れは、安息日ごとに、新月ごとに、そして小羊がほふられるよう定められたすべての祭りにおいても続いていきます。これらすべての時に、父は御子を通して、ご自身の喜びを私たちに注いでくださいます。私たちが御子を認めると、その命の流れは私たちの心の中へと流れ込み、私たちはその過程で清められます。そして、神の子としての安らぎの内に生きるとき、私たちは罪から離れるようになり、もはや以前のように、自らを孤独で価値のない者として生きることはなくなるのです。

もし、いけにえの制度が、六千年間にただ一つの出来事だけを指し示すために作られたのであれば、一年に一匹、あるいは七年に一匹の小羊をほふるだけで十分だったのではないでしょうか。毎日、毎週、毎月、そして毎年のいけにえは、それらのいけにえが捧げられる時ごとに、神の愛の流れが注がれることを示しているのではないでしょうか。もしその時々に命を与える流れが存在しなかったとすれば、幾千もの動物がほふられたことは、それをささげる人々にとって意味ある利益ももたらさなかったことになるでしょう。それはただ、将来のメシアについての教えを伝え続ける役割しか果たさなかったことになります。もしモーセが、「世の初めからほふられた子羊」である神の子の犠牲を通して、父の喜びの貴重な流れの中に生きていなかったなら、カルバリーから降り注ぐ光が彼の顔に輝くことは不可能だったでしょう。（ヨハネの黙示録 13 章 8 節）

もし安息日が、父が御子への喜びを最も豊かに表される時であるなら、父がこのメッセージを時間のあらゆる区分の中に刻み込もうとしておられると考えることは、それほど難しいことでしょうか。毎日、毎週、毎月、毎年、七年ごと、そして七×七年プラス 1 年ごとに、父はご自分の子どもたちに呼びかけておられます。父の愛の生ける流れは、定められた時ごとに、より豊かに私たちの上に注がれます。なんと尊い思いでしょうか。それは安息日をいっそう甘美なものとし、私たちの心に期待感を抱かせます。少し考えてみてください。朝、目覚めて礼拝のために神の前に出るとき、その時まさに父の御霊があなたの上に注がれ、「あなたは私の愛しい子。私はあなたを喜ぶ」と語りかけておられることを、さらに深く受け止めることができるのではないでしょうか。同じことが夕方にも起こります。そして安息日ごとにも起こります。その祝福の流れは絶えることなく続いていくのです。これは、あなたの望むことですか。さあ、起きて、床を取り上げて歩きましょう。

潤いの季節

「私は、イエス・キリストによって神の子とされたことを知るために、特別な時を待つ必要はありません。私は毎日、毎秒そのことを知っています。」そのように言う人が多いかもしれません。しかし、あなたは自分の妻や子供たちに同じことを言うでしょうか。「家族の大切さを思い起こすための特別な時は必要ありません。私たちは互いに愛し合っていることを知っているし、それはいつでも伝えられます。だから記念日や特別な行事など必要ありません。」あるいは、妻が夫に向かって、「あなたを愛していることは分かっているのだから、私たちの関係を祝うための特別な親しい時間など必要ありません。」と言うでしょうか。人生のあらゆることには、それにふさわしい時があるというのは自明の事実です。私たちは一日中食べ続けるのではなく、決まった時間に食事をします。仕事、遊び、睡眠にも決まった時間があります。同じように礼拝にも、他の活動をいったん止めて、神に心を向けるための特別な時間があります。これは、聖書が明確に示している原則なのです。

伝道の書３章１節　天の下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある

聖書は、私たちが神の戒めに耳を傾けるとき、神から与えられる義は海の波のように押し寄せると語っています。

イザヤ書 48 章 18 節　どうか、あなたは私の戒めに聞き従うように。そうすれば、あなたの平安は川のように、あなたの義は海の波のようになる。

波は一定のリズムをもって引いたり満ちたりします。父なる神が、その定めによって私たちのもとに来られるのも、それと同じ仕組みです。それぞれの波は浜辺へと押し寄せ、やがて海へと引いていきます。さらに大きな視点で見ると、潮の満ち引きもまた、浜辺を上り、そして再び引いていきます。そして新月と満月のときには、潮はさらに高く浜辺へと押し寄せます。こうした自然界の不思議はみんな、神の正義がどのように私たちのもとに来るのかを教えているのです。

聖書がいつ癒しが起こるかについて何と言っているかに注目してください。

使徒行伝 3 章 19 節　だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。こうして、主のもとから慰めの**時**が訪れる。

この聖句は、癒されるの*時*が訪れることを教えています。ギリシャ語では、複数形であり、癒される時が一度きりではないことを示している。さらに、罪の取り去りは、封印について語るものであり、その封印は安息日と深く結びついているのです。

ヨハネの黙示録 7 章 2～3 節　また、もうひとりの御使が、**生ける神の印**を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、「**私たちの神の僕らの額に、私たちが印をおしてしまうまで**は、地と海と木とをそこなってはならない」。

イザヤ書 8 章 16 節　あかしを一つにまとめ、**教**をわが弟子たちのうちに**封じて**おこう。

「しるし」と「封印」という言葉は、互いに置き換えて用いることができます。

> ローマ人への手紙4章11節　そして、アブラハムは割礼という**しるし**を受けたが、それは、無割礼のままで信仰によって受けた義の**証印**であった。

> 申命記6章6～8節　今日、私があなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。**またあなたはこれをあなたの手につけてしるし（封印）とし、あなたの目の間（額）に置いて覚えとする。**

> エゼキエル書20章12，20節　私はまた彼らに安息日を与えて、私と彼らとの間のしるし（**封印**）とした。これは主なる私が彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。…わが安息日を聖別せよ。これは私とあなたがたとの間の**しるし（封印）**となって、主なる私があなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである。

安息日が神の封印であるというなら、それは私たちと神との間に働く神の奇跡であると信じなければ、どうして理解できるのでしょうか。では、その奇跡とは何でしょうか。それは、神の子が、「あなたは私の愛する子。私はあなたを喜ぶ」という父の言葉を受け入れるとき、その心が柔らかく溶かされることである。彼は、自分が神に対して犯してきたあらゆる悪を知りながらも、その真理を受け入れます。そして、自分が赦されたことを信じ、キリストの中で父の腕の中に憩うのです。

祝福の広がり

自然界のさまざまなものは、さまざまな形で神の愛を私たちに伝えています。海の潮の満ち引きは、太陽と月の影響を受けます。そして、新月や満月の時には、潮は普段よりも高くなります。聖書は、太陽と月が季節を示すために造られたと教えています。

> 創世記 1 章 14 節　神はまた言われた、天の大空に光があって昼と夜とを分け、しるしのため、*季節*（H4150）のため、日のため、年のためになる。

ヘブライ語で季節と訳されている言葉は、モエドです。

> *ストロング辞典* H4150 H3259 から；正確には、約束、つまり決まった時間や季節；**特にお祭りのこと**。

*ホルマン・クリスチャン・スタンダード聖書*では、この箇所は次のように訳されています。「それらは、祭りの時々、また日と年を示すしるしとなる。」。さらに脚注には、「あるいは、定められた時々」と記されています。

> **ジョン・ギル聖書注解：**ヨナタン・タルグム（アラム語訳）は、この箇所を次のように解釈している。「それらは、しるしと**祭りの時**のためにあり、日々の数を数えるためにあり、月の初めと年の初めを聖別し、月と年の調整、太陽の運行、新月、そして周期を定めるためにある。」また、ヤルヒ（中世フランスのラビ、別名：ラシ）は、「季節」という語を、**厳粛な例祭**を指すものとして解釈している。これは後にイスラエルの子らに命じられることになるものだった。しかし、それらの目的は特定の民族や特定の時間のためだけではなく、世界が存続する限り、世界のすべての人類のためのものであると述べている。

> **アダム・クラーク聖書注解：**「季節（モーエード）」とは、**聖なる祭り**が祝われる時を定めるためのものである。この意味で、この語は聖書の中でたびたび用いられている。したがって、**神がご自身の啓示の冒頭で、人が神の栄光のために毎年祝われるべき祭りがある**ことを知らせることは、まことに適切なことであった。また、この本来の語は「月」を意味すると理解すべきだと考える者もいる。実際、月は時の周期を測るうえで重要な役割を果たしているからである。

こうして見ると、太陽と月は、神が定められた時、特に祭りや祝祭の時を知るために用いられるよう造られたことがわかります。これらの祭りは、罪がこの地に現れる前から、すでに神のご計画の中に組み込

まれていたのです。最も興味深いことは、ヨハネの黙示録 12 章に登場する女に関する描写です。

> ヨハネの黙示録 12 章 1 節　また、大いなるしるしが天に現れた。ひとりの女が**太陽**を着て、足の下に**月**を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた。

この「女性」は、預言的には神の教会、すなわち神に忠実な人を表しています。神は、「私はシオンの娘を、美しくたおやかな女になぞらえた」（エレミヤ書 6 章 2 節）と語られ、また、「…シオンよ、あなたは私の民である」（イザヤ書 51 章 16 節）と宣言しておられます。パウロは、次のように書いています。「私はあなたがた（教会）を一人の夫に嫁がせたのは、純潔な乙女としてキリストにささげるためである」（コリント人への第二の手紙 11 章 2 節）

ヨハネの黙示録の中で、神の教会は、その神の定める時に身に包んでいるのです。太陽と月と星は、主の御前から与えられる刷新の時々を示すために備えられたのです。パウロもまた、このことについて、テサロニケの人々に次のように語っています。

> テサロニケ人への手紙一 5 章 1 節　兄弟たちよ。その時期と場合とについては、書きおくる必要はない。

ここで用いられている*時期*に当たるギリシア語は、創世記 1 章 14 節のギリシア語旧約聖書で用いられている季節の言葉とまったく同じです。この言葉は、ヘブライ語ではモエドです。

このように、ヨハネの黙示録 12 章に示されている神の教会は、神の愛の光を身にまとっているのです。その愛は、安息日・七の原則に従って七の数えと結びついて、刷新の時々の中で明らかにされます。安息日は、父が御子への深い喜びを最も豊かに表された時です。使徒ヨハネもまた、この衣を身にまとっていたことをが書かれています。

> ヨハネ第一の手紙 3 章 1 節　大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。私たちは、すでに神の子なのである。

これこそ、キリストが荒野でサタンに立ち向かわれたときに身にまとっておられた衣でした。主は洗礼のとき、この確信にしっかりとすがられたのです。

> マタイによる福音書 3:17　そのとき、「これは私の愛する子、私の心にかなう者」と言う声が、天から聞こえた。*（ティンダール訳）*

神の教会は、子羊の血（犠牲）と、彼らのあかしの言葉によって勝利します。そして、そのあかしとは、彼らが確かに神の子どもであり、父に愛されているということです。このあかしは、特に安息日・七の原則の中で彼らに与えられます。

さて、太陽と月と潮の満ち引きとの関係に話を戻すと、週ごとの安息日は、地球に対する太陽の動きを七回数えることによって守られています。また、年間の祭りはすべてヘブライ暦の最初の七か月に行われ、地球に対する月の周期を七つ数える必要があります。もし太陽と月が海の潮の満ち引きに影響を与えているのであれば、週ごとの安息日が年間の安息日（過越の祭りや仮庵の祭りなど）と重なるとき、そこには霊的祝福の大潮があると考えるられるのではないでしょうか。

> ヨハネによる福音書 19 章 31 節　さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、（特に**その安息日は大事な日であったから**）、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした。

キリストは過越の祭りの時期の金曜日に十字架に架けられました。ちょうど、創造の仕事を週の六日目に終え、七日目に休まれたように（創世記 2 章 1〜3 節）、キリストもまた週の六日目に「すべてが終わった」と叫ばれ、七日目に休まれました（ヨハネによる福音書 19 章 30 節、ルカによる福音書 23 章 54〜56 節）。キリストの死の翌日は、第七日の安息日でした。しかも、その安息日は無酵母パンの祭りの期間中であったため、ヨハネはこの日を大いなる安息日と呼んでいます。それは、週ごとの安息日と年ごとの祭りが重なった安息日でした。ギリシア語にはこの言葉は、*大いなる*、*偉大な*、*声高い*と訳せます。安息日と祭りが重なるとき、私たちの父が子供たちに語りかけられる御声は、より力強く私たちに響き、深く心に届くのではないでしょうか。

海の潮がひときわ高く満ちるように、そのような時には、私たちの魂に語りかける御霊の潮もまた、ひときわ豊かに満ちるのではないでしょうか。

民数記28章と29章を読むと、週ごとの安息日には、供え物や小麦粉、そして油の量は、毎日の供え物の二倍であったことがわかります。さらに、新月や年ごとの安息日になると、その量はますます増加していきます。小麦粉と油はパンの材料であり、そのパンはメシアを表しています（ヨハネによる福音書6章48〜51節）。その意味は明らかです。安息日ごとに（そして神が定められたすべての時に）私たちは彼の聖霊、すなわちイエスご自身の臨在という二倍の祝福を受けるのです。（ガラテヤの信徒への手紙4章6〜7節）。

ヨハネの黙示録12章で女性は月の上に立っています。そして詩篇にはこう書かれています:

> 詩編 104 篇 19 節　**あなたは月を造って季節（モエド）を定められた。**日はその入る時を知っている。

主は、季節又はモエドのために月を備えられました。そして、父が定められたその時に、私たちが父の御声に耳を傾けるなら、その御声はよりはっきりと聞こえ、「あなたは私の愛する子。私はあなたを喜ぶ。」と語りかけてくださるのです。

これは、父と御子との関係と完全に調和しています。神の御子が父の栄光の輝きであるように、年間の祭りもまた、週の定められた時の中でキリストを通して私たちに示される父の愛を、よりいっそう明るく輝かせるのです。この原則についてさらに詳しく知りたい方は、書籍 *Divine Pattern of Life* を参照ください。*fatheroflove.info*.で入手できます。

もし使徒ヨハネが、無発酵パンの祭りの第一日目と週ごとの安息日が重なる日を 大いなる安息日と呼んだのであれば、その日が特別であるのは、安息日本来の意味である、父からの祝福がより豊かに注がれること以外に何があるのでしょうか。どうか自ら味わい、確かめてください。

> ヨハネの黙示録 14 章 1 節　なお、私が見ていると、見よ、小羊が**シオンの山**に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、**その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた**。

私たちが神の御霊によって封印されるとき、私たちは神の御名、つまり神の御品性によって封印されます。その御名とは、それは、安息日がしるしとして示している、あの自己を求めない愛の品性です。神の御名（御品性）は、サタンの偽りに対する最後の証しとして、神の民のうちに完全に再現されるでしょう。そのとき神は、「あらゆる思いを捕らえてキリストに従わせる」（コリント人への手紙二 10 章 5 節）という偉大な御業を成し遂げられ、私たちは、ついに神の安息の中へと完全に入るのです。

> ヨハネの黙示録 19 章 7 節　私たちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊（イエス）の婚姻の時がきて、花嫁（協会）はその用意をしたからである。

このことは、安息日を意味するヘブライ語の単語「シャバット（Shabbath）」の内訳を見るとよくわかります。**SH（シェム）＝名**（例えば ***Shem*** は「名」を意味する。）。**AB（アブ／アバ）＝父**。**B（ベート）＝住まい・住まう場所**（例えば ***Bethlehem*** は「パンの家」、***Bethel*** は「神の家」を意味する。）。**ATH ＝ 誓い/しるし**。これらを合わせて考えると、*安息日（Shabbath）* が私たちにとって何を意味するのかが見えてきます。**「父のしるしが宿る住まい」**それが安息日の意味なのです。そして、父の御名、すなわち父の御品性が私たちの額に封印されるという真理を考えると、私たちは安息日のしるし「s**ABBA**th」に目を向ければ、それで十分なのです。

> ガラテヤ人への手紙 4 章 6 節　このように、あなたがたは子であるのだから、神は私たちの心の中に、「**アバ、父よ**」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。

もし第七日の安息日が道徳的な祝福であり、さらに祭りが安息日の名を受け継いでいるのであれば、それらもまたその祝福を受け継いでいるのではないでしょうか。キリストが父の完全な祝福を受け継がれたように、祭りもまた安息日の豊かな祝福を受け継いでいるのではない

でしょうか。そして、神の御子が父の栄光の輝きであるように、祭りもまた安息日の栄光の輝きではないでしょうか。

サタンが、人々にキリストを通して天の父から与えられる完全な祝福を受けさせたくないと考えていることは、それほど理解し難いことでしょうか。彼は、それを妨げるためならあらゆることを行います。彼は、神聖な祭りと律法の時を変えようとしてきました。友よ、サタンはあなたが祝福を受けることを望んでいません。彼は、刷新のために定められた時に、大潮のように満ちてくるイエスの甘美な御霊に、あなたが触れられることを望んでいないのです。見てください、主は戸の外に立って、義の泉を求めて飢え渇く者たちのために戸をたたいておられます。

歴史の証言

今でも、ユダヤ人は安息日ごとに、「トーラーとハフタラー」と呼ばれる聖書朗読を行っています。これらは、トーラー（モーセ五書）と預言者の書からの聖書の箇所であり、互いに関連する内容となっています。イエスが、「わたしが律法や預言者を廃するために来たと思ってはならない…」（マタイによる福音書 5 章 17 節）と言われたとき、彼はまさにこの「トーラーとハフタラー」を指していました。ルカによる福音書 4 章 16〜21 節に記されているように、ある安息日にイエスがイザヤ書 61 章 1〜2 節を朗読されたとき、それはその安息日に定められていたハフタラーの朗読箇所でした。

> ルカの福音書 4 章 18〜19 節　「主の御霊が私に宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、私を聖別してくださったからである。主は私をつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、**主のめぐみの年**を告げ知らせるのである」。

ほとんどすべての解説者たちは、「主の恵みの年」とは安息年（七年目）あるいはヨベルの年（七回の安息年の後の五十年目）を指していると考えています。注目すべきことは、キリストが最初の演説におい

て、ご自身のメシアとしての使命に、安息年の言葉を用いて宣言されたことです。これらの一年間の安息は、虐げられた者たちにとって解放の時となりました。そのような時には…

1. その土地は休耕地とされ、貧しい人々、土地を奪われた人々、そして動物たちのために、無償の恵みをもたらすものとされた。（出エジプト記 23 章 11 節、レビ記 25 章 6 節、申命記 24 章 19～22 節、レビ記 19 章 9～10 節）
2. 負債は免除された。（申命記 15 章 1～6 節）
3. 奴隷は解放された。（出エジプト記 21 章 2～6 節、申命記 15 章 12～18 節）
4. 財産は本来の所有者に返還された。（レビ記 25 章 29～34 節）

新約聖書や歴史の記録を読むと、イエスの死後もなお、イエスに従う者たちが刷新の時々を守り続けていたことは明らかです。

「ローマ帝国の各地、特に東方には、その生活様式が外見上ユダヤ人とほとんど変わらないユダヤ系キリスト教徒たちがいたでしょう。…彼らにとって、イエスが最後の晩餐で弟子たちと結ばれ、その死によって確立された新しい契約は、神とイスラエルとの間に結ばれた契約がもはや効力を持たないことを意味するものではなかった。**彼らはまだ過越祭、五旬節、仮庵祭を守り続けていた**。 また、割礼を受け、**週ごとの安息日を守り**、モーセの食物規定も守り続けていた。…これらの人々の勢力は非常に強く、西暦 70 年のエルサレム陥落に至るまで、キリスト教運動の中心的存在であった。」（W・D・デイヴィス「*パウロとユダヤ人キリスト教（Paul and Jewish Christianity）*」72 頁）

安息日：マルコによる福音書 1 章 21 節・6 章 2 節、 ルカによる福音書 4 章 16 節・ 31 節・ 6 章 6 節・ 23 章 56 節、 使徒言行録 13 章 14 節・42～44 節・15 章 21 節・15 章 13 節・17 章 2 節・18 章 4 節。（注）神の安息日、週ごとまたは年ごとのものはすべて太陽によって定められ、日没に始まる。（レビ記 23 章 32 節、 ネヘミヤ記 13 章 19 節）。週ごとの安息日は金曜の日没に始まり、土曜の日没に終わる。イザヤは、神の民が新しい地で新月と安息日を守ることを預言している。（イザヤ書 66 章 22～23 節）。

「**初代のキリスト教徒たちは安息日を深く尊び**、その日を礼拝と説教のために費やしていた。そして、**この慣習が使徒たち自身から受け継がれた**ことは疑う余地がない。そのことは、この問題を扱ういくつかの聖句によって明らかである。」（「*主の日についての 6 つの対話（Dialogues on the Lord's Day）*」189 頁、ロンドン：1701 年、トマス・H・モレール博士；*英国国教会の聖職者*）

「…安息日は、彼らを神の民全体の歩みと結びつける強い絆であった。そして、彼らが安息日を聖なるものとして守ったのは、**単にイエスの模範に従ったからだけではなく、イエスの命令に従ったからでもあった。**」（*日曜日の歴史（Geschichte des Sonntags）*13～14 頁）

「**古代キリスト教徒は、土曜日すなわち第七日を非常に大切に守っていた。**すべての東方教会をはじめ、世界の大部分が、安息日を祝祭日として守っていたことは明らかである。…さらにアタナシウスは、彼らが安息日に宗教的集会を開いていたことを伝えている。それは**彼らがユダヤ教化していたからではなく、安息日の主であるイエスを礼拝するためであった。**エピファニオスも同じことを証言している。（*キリスト教会の古代誌（Antiquities of the Christian Church）*第 2 巻、第 20 編、第 3 章、第 1 節、66、1137～1138 頁）

過越祭・除酵祭：ルカによる福音書 22 章 13～16 節（注）イエスはご自分の民に、過越祭を継続して祝うように命じられた。ただし、それは血を流す動物のいけにえによるのではなく、無酵母パンと、無発酵のぶどう酒によって行われるものであった。彼は、ご自身の死によって過越祭が廃止されるのではなく、「神の国において成就するまで」続くものとして語られたのである。これは「小羊の婚宴」を指している（ヨハネの黙示録 19:9 節）。使徒言行録 12 章 4 節 **（注）** 欽定訳聖書（KJV）はここで *イースター*（復活祭）という言葉を用いているが、原文のギリシア語は **パスカ（過越祭）** である。使徒言行録 12 章 3 節、20 章 6 節、コリントの信徒への手紙一 5 章 6～8 節 **（注）** もし過越祭がキリスト教によって守られるべきものでなかったなら、パウロが過越の時期の行動を是正する必要はなかったであろう。問題は過越祭そのものではなく、その期間中に教えられ、行われていた事柄にあった。コリント教会にはユダヤ人信徒も

いたが（コリントの信徒への手紙一 7 章 18～19 節）、主に異邦人からの改宗者で構成されていた（コリントの信徒への手紙一 6 章 9～11 節、8 章 7 節、12 章 2 節）。

ヨハネの弟子の一人が、使徒ヨハネ自身が何を信じていたかを私たちに示しています。ヨハネは、過越祭を守ることが福音の一部であると信じていたのです。

ポリュクラテス（西暦 195 年）：「それゆえ私たちは、この日を少しも変えることなく守り続けている。加えることも取り去ることもせずに。アジア（小アジア）には偉大な聖人たちが眠っている。彼らは、主が天から栄光のうちに来られ、すべての聖徒たちを集められる日に復活するのである。その中にはフィリポがいる。…またその二人の娘たちもいる。…さらに、**主の胸に寄り添ったヨハネもいる**。また、スミルナの司教であり殉教者でもあったポリュカルポス、エウメネアの司教であり殉教者でもあったトラセアスもいる。…（さらに）サガリス、パピリウス、メリートーなどもいる。これらのすべての者は、**福音に従って過越祭の十四日目を守り続けた。彼らは決してその道から外れることなく、信仰の規範に従っていたのである。**そして私も、ポリュクラテスもまた、あなたがたの中では最も小さい者ではあるが、先祖たちから受け継いだ伝統に従って生きている。そのうちのいくつかに私は従ってきた。私の親族のうち七人は司教であり、私は八人目である。私の親族は、人々がパン種を取り除くその日を常に守ってきた。だから、兄弟たちよ、私は主に従って六十五年を過ごし、あらゆる地方の兄弟たちと交わり、すべての聖書を学んできた。だからこそ私は脅しを恐れない。なぜなら、私よりも偉大な人々が、「人に従うよりも、神に従うべきである。」と語っているからである。」（エウセビオス「教会史」第 5 巻第 24 章、「*ニケア教父とニケア後教父選集*（*Nicene and Post-Nicene Fathers*）」第 2 シリーズ第 1 巻）

初穂：新約聖書ではこの祭りについて具体的な記述はないが、その象徴的な意味は、コリントの信徒への手紙一 15 章 20～23 節の中で明確に示されている。また、エゼキエル 45 章 21 節には、「第一の月の十四日に、あなたがたは過越祭を祝わなければならない。それは七日間の祭りであり、その間、無酵母パンを食べなければならな

い。」 と記されている。この聖句からもわかるように、過越祭は除酵祭の全期間にわたって行われる。したがって、除酵祭の期間中の最初の安息日の翌日に行われる**初穂の祭り**もまた、この過越の期間の一部に含まれている。

七週の祭り／ペンテコステ: 使徒行伝 2 章、 20 章 16 節

ラッパの祭り：新約聖書にはこの祝祭についての具体的な記述はない。しかし、その象徴的な意味は、コリントの信徒への手紙一 15 章 52 節やヨハネの黙示録 8 章 2 節、6 節において明確に示されている。

贖罪の日：使徒行伝 27 章 9 節（注）ここで「断食」と訳されているのは、一般的に断食の日として考えられていた贖罪の日を指している。ヨハネの黙示録 11 章 18～19 節（注） 欽定訳聖書（KJV）における「彼の証しの箱」は、契約の箱を指している。贖罪の日、ヨム・キプールには、大祭司が契約の箱の置かれている至聖所へ入った。そこで彼は、聖所を清める儀式を行った。それは象徴的に、神に対してサタンが引き起こしたあらゆる偽りから神の民を清めることを意味していたのである（レビ記 16 章、ダニエル書 8 章 14 節）。また、ラッパの祭りと贖罪の日は、歴史的に封印と裁きの厳粛な時として理解されてきた。さらに、ヨハネの黙示録 14 章 6～7 節も参照されたい。

仮庵の祭り：ヨハネの黙示録 7 章。この祭りについては、新約聖書の中で、具体的な記述は見られない。しかし、その象徴的な終末の意味は、ヨハネの黙示録 21 章 3 節において明確に示されている。（注） ゼカリヤ書 14 章は、キリストの再臨の後にも、神の民がこの祭りを祝うことを示している。

父の喜びが、キリストを通して安息日・七の原則の中で、子供たちに与えられることを受け入れるなら、主が定められたすべての時を福音の一部として理解するのは簡単なことです。

主の祭りは、十字架の前に生きた人々にとって、実際には霊的な祭りではなかったと信じている人が多くいます。彼らは、これらの祭りはただ、自分たちの時代から何百年も後のキリストの働きを象徴するものに過ぎなかったと考えています。しかし、そのような考え方は、十

字架の前の福音におけるキリストの働きを否定することになり、また、カルバリーの光がモーセの顔に輝いていたということをも否定することになります。**私たちが安らぎを得る方法はただ一つです。それは、キリストの御霊を通してです。**以下の聖句はすべて、この安らぎ、すなわち**キリストにあって父の喜びの中に憩うことによって与えられる安息**について語っています。

> 出エジプト記 16 章 23 節　モーセは彼らに言った、「主の語られたのはこうである、あすは主の聖なる**安息日**（H7677 - *シャバトン*）で休みである。」
>
> 出エジプト記 31 章 15 節　六日のあいだは仕事をしなさい。七日目は全き休みの**安息日**（H7677 - *シャバトン*）で、主のために聖である。すべて安息日に仕事をする者は必ず殺されるであろう。
>
> レビ記 16 章 30～31 節　この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである。これはあなたがたの全き休みの**安息日**（H7677 - *シャバトン*）であって、あなたがたは身を悩まさなければならない。これは永久に守るべき定めである。
>
> レビ記 23 章 24 節　イスラエルの人々に言いなさい。「七月一日をあなたがたの**安息日**（H7677 - *シャバトン*）とし、ラッパを吹き鳴らして記念する聖会としなければならない。」
>
> レビ記 23 章 39 節　あなたがたが、地の産物を集め終ったときは、七月の十五日から七日の間、主の祭を守らなければならない。すなわち、初めの日にも**安息日**（H7677 - *シャバトン*）をし、八日目にも**安息日**（H7677 - *シャバトン*）をしなければならない。

ここで挙げたすべての箇所で、*安息日*という言葉が使われれていることに注目してください。ここでの*休み*とは、まさにキリストの内にある*安息*そのものです。キリストを離れて、休むことも、*安息*することも不可能なのです。

> マタイによる福音書 11 章 28 節　すべて重荷を負うて苦労している者は、私のもとにきなさい。あなたがたを*休ませ*てあげよう。神の

> 安息に入った者は、神がご自分の業を終えて休まれたように、自らの業を離れて休むのである。
>
> ヘブライ人への手紙 4 章 11 節　私たちは、この安息に入るように努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にならって、落ちて行く者が出るかもしれない。

キリストが用いられた*休み*という言葉は、ギリシア語の*サバトン*であり、これはヘブライ語の*シャバトン*に対応する語です。したがって、第四の戒めは、キリストの御霊を通して私たちに父の喜びをもたらす福音の中でしか守ることができません。

安息日をより深く

私たちはこれまでに、本当の安息日を守るということは、自分自身の休みではなく、**「神の安息」**に入ることであると見てきました（ヘブル人への手紙 4 章 11 節）。神は、疲れたから休まれたわけではありません。「あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者であって、**弱ることなく、また疲れることなく**、その知恵ははかりがたい。」（イザヤ書 40 章 28 節）だから、週の七日目に自分の仕事を休むことを単なる「義務」として行うだけでは、本当の意味で安息日を守っていることにはなりません。イエスは、このことをユダヤ人たちに教えられたのです。主は彼らに悔い改めを求め、「神の真の安息」に入るよう呼びかけました。すなわち、神が人に成し遂げようと望んでおられる創造の業に身を委ね（信じ）、休むことです。それは、私たちを新しい（自己中心ではない）被造物として造り変え、神ご自身のかたちと似姿へと回復する働きなのです。先にマタイによる福音書 11 章 28 節でイエスが教えられたように、真の安息を与えることができるのは、ただキリストご自身の存在だけです。その存在だけが、物事を聖なるものとし、私たちに真の安息をもたらすのです。

> 出エジプト記 33 章 14 節　主は言われた。「私**自身**が一緒に行くであろう。そしてあなたに**安息**を与えるであろう。」

私は生まれてからずっと安息日を守ってきました。その間ずっと教会の礼拝に出席してきました。安息日は、主との交わりを持つための特別な時であると教えられてきました。それは、主の特別な日です。しかし、その長い年月の中で、安息日が実際には聖霊からの特別な賜物であると説明されたことは一度もありませんでした。私は安息日に関する A.T.ジョーンズの著作を研究していたとき、彼の説教の一つの中で次のような記述に出会いました。

> その日を聖なるものとしたのは何でしょうか。（会衆：神の臨在です。）**神の臨在が物事を聖なるものとします。それは場所を聖なるものとし、人を聖なるものとします。神の臨在がその日を聖なるものとしました。そうすると神の神聖さがその日に結び付けられるのです。**神の臨在、すなわち聖なる神の臨在が、第七日である安息日に結び付けられます。**では、人がその日を迎えるとき、霊的な心をもって、すなわち神の御霊の心をもってその日に近づき、その日に備えられている霊的な休息や霊的な回復、霊的な祝福を受けるとき、その人はまた、その臨在を受け、臨在にあずかる者となるのではないでしょうか。その臨在の中には、彼を変える神の聖さがあるのです。まさにその通りです。それこそが安息日を守るということなのです。**
>
> それでは、神はその日を聖なるものとされたのですが、それらの聖句をここで繰り返す必要はありません。何が聖なるものにするのでしょうか。（会衆：神の臨在です。）それならば、神の臨在、その聖別する力は七日目にあるということです。その通りでしょうか。（会衆：はい。）**そうであれば、主の安息日における主ご自身のお考えに従って主の安息日に来る人、そしてその意図を持つ人は、霊的な休息を得ます。彼はそこにそれを見いだすのです。彼は霊的な回復と喜びを見いだし、また霊的な祝福を見いだします。**さらに、神の臨在、そしてその臨在が自らが変えるためにもたらす聖さを見いだすのです。そして、その臨在の中に、日を聖めると同時に彼を聖める聖別の力を見つけます。では、これらすべては何のために与えられたのでしょうか。なぜ安息日は造られたのでしょうか。（会衆：人のためです。）（マルコによる福音書 2 章 27 節）そのとおりです。安息日は人のために造られました。**それならば、神が休まれ、**

その霊的な休息をその日に置かれたのは、人のためではなかったでしょうか。（会衆：はい）神の癒やし、その日の喜びも人のためでした。その日を祝福されたのも人のためでした。神の臨在がその日に与えた聖さも人のためでした。その日を聖別する神の臨在も、人のためでした。そうであるなら、人が安息日を通して神の臨在にあずかり、神の霊的な休息、霊的な祝福、聖さ、聖なる神の臨在、そして自らを聖別する神の臨在を、実際の経験によって知るためではなかったでしょうか。**これこそ神が安息日を通して人にもたらそうとされたものではないでしょうか。ですから、安息日の中にこれらすべてを受ける人こそ、真に安息日を守る人なのです。そして、その人自身がそれを知っています。彼はそれを知り、そのことに大きな喜びを見いだすのです。**

さらにもう一つのことがあります。創造において実際に働かれたお方は誰だったでしょうか。（会衆：キリストです。）**誰が休まれたのでしょうか。（会衆：キリストです。）誰が癒されたのでしょうか。（会衆：キリストです。）誰が祝福されたのでしょうか。（会衆：キリストです。）誰の臨在がそれを聖なるものとしたのでしょうか。（会衆：キリストの臨在です。）誰の臨在がその日にあるのでしょうか。（会衆：キリストです。）**それでは、イエス・キリストの臨在によって聖別されず、聖なるものとされず、祝福されず、また休みを与えられない人は、安息日を守ることができないのでしょうか。**おわかりでしょうか。人のうちにキリストがおられなければ、安息日を守ることはできないのです。なぜなら、安息日にはキリストの臨在があり、安息日自体がそれをもたらすからです。**（A.T.ジョーンズ、1893 *年総会説教集（GCB Sermon）第 20 説教*）

故 A.T.ジョーンズが、安息日における祝福とは神の臨在であり、またキリストの臨在であることを、いかに注意深く示しているかに注目してください。私は生涯にわたって安息日を「守って」きましたが、それにもかかわらず、このことを理解してはいませんでした。聖霊という賜物の最も豊かな満ちあふれる恵みが安息日の中に見いだされるということが、なぜ世界に大々的に伝えられていないのでしょうか。これこそが、安息日が神の印であり得る唯一の方法です。なぜなら、私たちは聖霊によって証印を受けるからです。

エペソ人への手紙 4 章 30 節　神の聖霊を悲しませてはいけない。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の**証印**を受けたのである。

エペソ人への手紙 1 章 13 節　あなたがたもまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、**約束された聖霊の証印をおされたのである。**

約束の聖霊は、刷新の時に私たちのもとへ来ます。聖霊は、定められた時に私たちに約束されています。このことを説明するために、キリストの復活後に与えられた聖霊の約束が、どのような時に成就したのかを考えてみましょう。

使徒行伝 1 章 7～8 節、 2 章 1～2 節、 4 章、 7～8 章、13～15 章イエスは彼らに言われた。「時や時期は、父がご自身の権威のもとに定めておられるので、あなたがたの知るところではない。しかし、**聖霊があなたがたの上に臨むとき、力が与えられる。**そして、あなたがたは、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てにまで、私の証人となるのである。」…さて、**ペンテコステの日**が完全に来たとき、人々はみな心を一つにして同じ場所に集まっていた。すると突然、激しい突風のような音が天から起こり、彼らの座っていた家全体に満ちた。…そして、**彼らはみな聖霊に満たされ、**御霊が語らせるままに、異なる言葉で語り始めた。…人々は皆驚き互いに言った。「見よ、話している人たちはみなガリラヤ人ではないか。それなのに、どうして私たちはそれぞれ生まれ故郷の言葉で聞くことができるのだろうか。」…しかし、ほかの者たちはあざけって言った。「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ。」しかしペテロは、十一人と共に立ち上がり、声を張り上げて彼らに語った。「ユダヤの人々、またエルサレムに住むすべての人々よ、このことを知っていほしい。どうか私の言葉に耳を傾けてほしい。あなたがたが思っているように、この人たちは酔っているのではない。今はまだ**朝の三時**なのだから。」

聖霊は、初穂の祭りから七週と一日を数えた後に、大いなる力をもって注がれました。それは朝のいけにえがささげられる時刻である*第三時*に起こりました。

私たちは、朝と夕のいけにえに応じて毎日御霊の賜物が与えられることを思い出します。朝のいけにえは第三時に、夕のいけにえはその六時間後に行われました。このように、聖霊の賜物は、ペンテコステの日の定められた時に、朝のいけにえの時間に与えられたのです。これは偶然の出来事ではなく、私たちの天の父が定められた時に正確に従って起こった出来事でした。月の上に立ち、太陽の衣をまとった女は、この定められた時に集って、主イエス・キリストを通して天の父からの祝福を受けるということを知っていました。

このように、確かに毎日特別な祝福があります。その祝福は朝と夕のいけにえと共にやってきます。今日の私たちにとって、それは救い主の犠牲を認めることを通して、父なる神からの賜物を受けるべく、朝と夕の礼拝に集まることを意味します。

長年、朝夕の礼拝を続けることが大変だと感じていました。しかし、これらが父なる神から毎日その御霊の賜物を受けるための約束された機会であることを知った今では、それは重荷ではなく喜びとなりました。これは救いを得るための行いではなく、信仰によってキリストの義を受け取り、主が招かれる時にそれに応えることなのです。あなたは、朝と夕にもたらされる御霊の賜物を受けたいですか。そのような賜物を必要ですか。もし父なる神がそれを私たちに与えようとしておられるなら、それは私たちがまさにそれを必要としているのではないでしょうか。

> イザヤ書 58 章 13～14 節　もしあなたが、安息日を踏みにじらないように足を引き留め、わが聖なる日に自分の利益を追わず、安息日を**喜び**の日と呼び、種の聖日を尊ぶべきものとし、自分の道を行かず、自分の楽しみを求めず、単にむなしい言葉を語らないことによってこれを尊ぶならば、そのとき、**あなたは主によって喜びを得**（主を喜びとし）、私はあなたに地の高い所を乗り通らせ（地を支配させ）、あなたの父祖ヤコブの受け継いだ文であなたを養う。そう、種の御口が語られたのだ。*国際標準訳（ISV）*

真の安息日を守る人とは、私たちの天の父が定められた時に御霊を送ってくださることを信じる人です。私たちは毎日決まった時間に食事をし、その食事によって五、六時間の間、力を得て活動します。同じ

ように、神は定められた時に御霊の賜物を受け取り、私たちはその祝福の力によって歩むのです。これこそが、より完全な意味での安息日なのです。

なぜ義人たちは、より完全な意味で安息日を宣べ伝えるのでしょうか。それは、安息日を通して聖霊の特別な賜物を受けているからです。サタンは、人々がそのような祝福を受けることを望んでいるでしょうか。もちろん、そうではありません。ヨハネの黙示録 12 章 17 節に注目してください。

> そして、龍（サタン、9 節参照）は、**女**に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、**神の戒めを守り**、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。

神の民は「神の戒めを守る」人々です。これが、サタンが「小さな角」の勢力を通して、神聖な祭りを変えようとした理由です。

> ダニエル書 7 章 25 節　そして彼（小さな角）は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。**彼はまた時と律法とを変えようと望む**。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手にわたされる。

あるいは、新改訳聖書が言うように:

> 彼（小さな角）は、いと高き方に逆らい、いと高き方の聖なる民を苦しめる。さらに、**彼らの聖なる例祭と律法を変えようと企む。** そして彼らは、一時と二時と半時の間、彼の支配の下に置かれる。

小さな角

この章に入る前に、私たちは誰かを裁こうとしているのではないことを強調しておきたいと思います。他人を非難し裁く者は、自らをも非難し裁いているだけです。なぜなら、私たちは皆、同じようなことをしているからです（ローマの信徒への手紙 2 章 1 節、マタイによる福音書 7 章 1～2）。私たちは皆、罪を犯し、私たちを裁かれない父なる神の栄光（御品性）に達することができていません。（ローマの信徒への手紙 3 章 23 節）。人類の歴史の中で起こった出来事は、サタンと

いう大いなる敵によってかき立てられた、堕落した人間性のうちにある神の御子に抱く憎しみを拡大して映し出したものにすぎません。これらの出来事は、真理と偽りとの霊的な戦いの影絵のようなものであり、キリストとサタンとの大争闘の証拠でもあるのです。

しかし、これらの「聖なる祭りと律法」は、一体どのようにして変えられたのでしょうか。この問いに答えるためには、歴史を調べ、小さな角がどのように安息日と祭りを変えていったのかという、長く悲しい物語を学ぶ必要があります。この歴史の概要については、「*Great Controversy*」および「*Life Matters*」という書籍をご覧ください。これらの書籍はいずれも *fatheroflove.info* で入手できます。ここでは、聖なる祭りと律法がどのように変えられたのかという問いに答えるために、小さな角の正体とその活動について基本的な概略を紹介していきます。

ダニエル書 7 章の冒頭で、ダニエルは幻の中で見た四つの獣のうち、四番目の獣からこの「小さな角」の勢力が現れることを記しています。そして天使いガブリエルは、これら四つの獣が四つ世界の王国を表しているとダニエルに告げました。さらに、四番目の獣についてガブリエルは次のように説明しています。

> ダニエル書 7 章 23〜24 節 …彼はこう言った、第四の獣は地上の第四の国である。これはすべての国と異なって、全世界を併合し、これを踏みつけ、かつ打ち砕く。…そして、十の角はこの国から起る十人の王である。その後にまたひとり（小さな角）の王が起る。彼は先の者と異なり、かつ、その三人の王を倒す。

ここでは、これらすべてを詳しく検証しませんが、読者の皆様に知っていただきたいことがあります。それは、何世紀にもわたり多くの聖書学者や教師たちが、これら四つの獣は、四つの世界帝国、すなわちバビロン（ライオンで表される）、メディア・ペルシア（熊で表される）、ギリシャ（ヒョウで表される）、そしてローマ（十本の角を持つ恐ろしい獣で表される）を象徴していると教えてきたということです。ダニエルは、この「小さな角」が第四の獣にある十本の角の間から現れると述べています（8 節参照）。したがって、この勢力はロー

マから現れるに違いありません。歴史を通じて、ローマには二つの段階がありました。すなわち、異教ローマと教皇制ローマです。教皇制ローマが支配的地位を確立すると、ローマ教会はすべての異教の教義をローマ・カトリックのキリスト教の中に取り入れ、さらに国家権力を用いて自らの教義を強制するようになりました。このようにして、この第四の王国はまさに「他のすべての王国とは異なる」もので、それは教会が国家を支配する宗教的・政治的な権力なのです。

ダニエル書の第 8 章において、ダニエルはこの同じ小さな角を、その政治的・異教的段階にあるものとして見ています。それは「南へ、東へ、また麗しい地へ向かって、はなはだしく大きくなった」（ダニエル書 8 章 9 節）と記されています。その後、第 10 節になると、この勢力は教皇制の段階へと移り、より宗教的な事柄に深く関わるようになります。

> ダニエル書 8 章 10～12 節　天の衆群に及ぶまでに大きくなり、星の衆群のうちの数個を地に投げ下して、これを踏みつけ、また自ら高ぶって、…**その角はまた真理を地に投げうち**、欲しいままにふるまって、自ら栄えた。

天の真理を地に投げ落とすとは、神の方法と真理を取り上げ、それらを堕落した人間の考え方の枠組みの中に置き換えることを象徴しています。この体系は、神の王国を、この世のあらゆる獣のような王国と同じ枠組みの中で表すことになります。こうして神の王国は、愛と自由の王国から、戦争と強制の王国へと「変えられて」しまうのです。

人類が罪に陥ったため、私たちは今では自然に神の許しを信じなくなっています。罪によって私たちの神に対する考え方が変わり、神に受け入れられるためには、自分の行いによって功績を積み、神を喜ばせなければならないと考えるようになりました。歴史を通してのユダヤ教と同様に、ローマ教会は神の律法を、違反者に懲罰を加えて執行すべき法典として提示しました。この「暗黒時代」において、神の聖なる律法は、本来の霊的なもの（ローマの信徒への手紙 7 章 14 節）から、人の手によって修正したり廃止したりできる恣意的な規則の集まりへと、私たちの心の中で「変えられて」しまいました。この誤った神学

は、現代のプロテスタント・キリスト教にも広く浸透しています。サタンは、もし人が神の律法を破れば、神は必ず正義を執行し、災い、病気、さらには死をもって罰さなければならないのだと私たちに思い込ませてきました。しかし、神の律法は人間の法律のようには機能しません。神の律法は、立法者である神の御品性を反映した設計の法則であり、命そのものの営みを支えている愛の法則なのです。確かに、「罪の報酬は死です」（ローマの信徒への手紙 6 章 23 節）。また、「罪とは律法に違反することです」（ヨハネの手紙一 3 章 4 節）。しかし、神が規則を破った罪人を処刑するのではありません。死は、罪のある生活がもたらす**自然な**結果なのです。それはちょうど、高度 35,000 フィートの飛行機からパラシュートなしで飛び降りれば死が**自然な**結果であるのと同じです。

> ヤコブの手紙 1 章 14～15 節　人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、誘われるからである。欲がはらんで**罪**を生み、**罪**が熟して死を生み出す。

私たちが神の御心から外れ、神が守りのために設けてくださった律法という垣根を越えて生きることを選ぶとき、神は私たちの選択の自由に干渉されません。その結果、私たちは自然に自分の蒔いたものを刈り取ることになります。神は虐待的な父ではありません。また、血に飢えた暴君でもありません。神はいつまでも「あわれみ深く、恵みあり、怒るにおそく、恵みとまことに富む」お方です（出エジプト記 34 章 6 節）。罪がこの地上に入り込んだときも、神もその律法も変わることはありませんでした。神の律法は、神ご自身の正義という神聖な御品性を写し出したものでだからです。

> イザヤ書 51 章 6～8 節　目をあげて天を見、また下なる地を見よ。天は煙のように消え、地は衣のようにふるび、その中に住む者は、ぶよのように死ぬ。しかし、わが救はとこしえにながらえ、わが義はくじけることがない。**義を知る者よ、心のうちにわが律法をたもつ者よ、わたしに聞け。**人のそしりを恐れてはならない、彼らののしりに驚いてはならない。彼らは衣のように、しみに食われ、羊の毛のように虫に食われるからだ。しかし、わが義はとこしえにながらえ、わが救はよろず代に及ぶ。

罪がこの世界に入ってから変わったのは、私たちでした。私たちの心も、性格も、人格も変わってしまいました。そして神に対する考え方も変わりました。私たちはもはや神を愛と赦しに満ちた父として見ることはなく、その規則に背く者の死を要求する怒りの神として見るようになってしまったのです。まさにそのことは、アダムとエバが禁断の木の実を食べた後に神の前から身を隠したときの例があります。そして神に問われたとき、アダムはこう答えました。「園の中であなたの声を聞きましたが、私は裸でしたので、**恐れて**身を隠しました。」（創世記 3 章 10 節）

サタンがどのようにローマ教会を欺き、神の律法を単なる恣意的な規則の一覧にすぎないものと考えさせ、それゆえに変更したり廃止したりできるものだと、世界のほとんどの人々に信じ込ませたかを見てください。

> 「教皇には、**時代を変え**、**法律を廃止し**、そしてあらゆるものを、キリストの教えでさえも特免する力を持っている。…教皇は権威を持ち、しばしばキリストの命令を特免する権限を行使してきた。」（「*教令集（Decretal）*、*司教職の転任に関する章）*」［教皇は神の律法を変更することができる］、*フェラーリス「教会辞典」*）

> 「長老派、バプテスト派、メソジスト派、そしてすべてのキリスト教徒に改めて思い起こしていただきたい。聖書のどこにも、彼らの日曜日の遵守を支持する根拠は存在しない。日曜日はローマ・カトリック教会の制度であり、その日を守る者たちはカトリック教会の命令に従っているのである。」（ブレイディ司祭、ニュージャージー州エリザベス発行「*ニュース*」紙、1903 年 3 月 18 日）

> 「私たちが土曜日ではなく日曜日を守るのは、カトリック教会がその祝日の位置づけを土曜日から日曜日へ移したからである。」（ピーター・ガイヤーマン、CSSR、「*教理問答（A Doctrinal Catechism）*」1957 年版、50 ページ）

> 「私たちは、聖なるキリストの使徒教会の権威に基づいて、安息日を第七日から第一日へ、すなわち土曜日から日曜日へ変更したので

ある。」（シーモア司教「*なぜ私たちは日曜日を守るのか（Why We Keep Sunday）*」）

「プロテスタントは…カトリック教会がその変更を行った後、公共礼拝の日として土曜日ではなく日曜日を受け入れている。…しかし、プロテスタントの人々は、日曜日を守ることによって、教会の代弁者である教皇の権威を受け入れているということに気づいていないのである。」（「*アワー・サンデー・ビジター（Our Sunday Visitor）*」1950 年 2 月 5 日号）

ローマ教会は安息日を変えただけでなく、神の祝祭すべても変えました。

「…カトリック教会は安息日だけでなく、その他のすべての〔いわゆる〕ユダヤ人の祭りも廃止したのである。」（T・エンライト司教、「*書簡(Letter)*」、1902 年 4 月 26 日）

前にも触れたように、ポリュクラテスや、イエスの弟子たちを含むキリスト教徒たちは、ユダヤ暦第一の月の 14 日に過越祭を祝っていたことを認めています。ローマ教会はこの件について議論し、自らのイシュタル（イースター）祭と一致する日へ変更しようとしました。この議論は、過越祭を守るべきかどうかではなく、**いつ**守るべきかという点にありました。歴史が示しているように、聖書に基づく過越祭の日付をイースター・サンデー（復活祭の日曜日）に置き換えたことが、その後、ローマによる安息日の変更、すなわち週の第七日（土曜日）から週の第一日（日曜日）への変更を固めるきっかけとなったことを確認しています。

「復活祭（イースター）の祝いが初期に発展し、それに伴って暦をめぐる論争が生じた主な理由は、キリスト教が（あるいは、偽りのキリスト教が）ユダヤ教からの独立を図ろうとしたことにあった。日曜日はすでに 2 世紀初めにはユダヤ教の安息日（神の安息日）に取って代わっていた。また、小アジアでは（ポリュクラテスらによる）ユダヤ暦ニサンの月 14 日の過越祭の日付を維持しようとする努力がなされたにもかかわらず、ニカイア公会議は春分（3 月 21 日）の後の満月の次の日曜日を毎年の復活祭の日として採用した。」

（ウォルター・エルウェル編、*福音主義神学辞典*、「イースター」1984 年）

「異邦人キリスト教徒がユダヤ系の血統から離れていったのは、ユダヤ人とその宗教に対してローマ皇帝たちの抑圧政策と、ユダヤ人がキリスト教徒に対して行った中傷運動の影響によるものであった。これらの要因は、異邦人キリスト教徒たちに、ユダヤ人という民族およびユダヤ教という宗教に対する軽蔑の念を伴ったキリスト教的神学を発展させた。教会の有力な教父たちは、「反ユダヤ」文書を数多く著し、ユダヤ人という民族を中傷するとともに、その宗教的信仰や慣習から歴史的価値を奪い去った。**この反ユダヤ運動による二つの大きな犠牲となったのが、安息日と過越祭であった。安息日は日曜日へ変更され、過越祭はイースター・サンデー（復活祭の日曜日）へ移されたのである。**（サムエレ・バッキオッキ「神の祭り：聖書と歴史における神の祭り 第 1 巻 春の祭り（*God's Festivals in Scripture and History, The Spring Festivals*」」103 頁）

神の暦に定められた聖なる祝祭は、キリスト教の中では、もともと太陽崇拝の神々を祝うための祝祭日に置き換えられてしまいました。今日、多くのキリスト教徒は、そのことに気づかない知らず知らずのうちに、人間の伝統に従いながら神の戒めを拒んでいます。クリスマス、イースター、バレンタインデー、ハロウィンといった祝日は、いずれも異教的な起源を持ち、神が御言葉によって私たちに与えられたものではありません。世界中の人々はこれらの祭りを知っています。しかし、聖書（レビ記 23 章）に示されている神の祭りについて知っている人はどれほどいるでしょうか。それらの祭りは、私たちに聖霊をより多く与え、神の壮大な救いの計画を祝福し、天の父における私たちの息子・娘としての安息を与えてくれるのです。なぜ私たちは異教の時についてはよく知っているのに、神の定められた時についてはほとんど知らないのでしょうか。

「ローマからは、今度は太陽崇拝に基づく背教にさらに新たなものが付け加えられた。**初期のキリスト教徒はその大半がユダヤ人であったため、真の過越であるキリストの死を記念して、引き続き過越祭を祝っていた。そして、この習慣は異邦人の中からキリストに転**

向した人々の間にも受け継がれていた。したがって、その祝祭は常に本来の過越の日、すなわち第一の月の十四日に行われていた。しかしローマは、またローマから西方全体は、この祝祭の日を太陽の日（サンデー、日曜日）に採用した。…ローマの規則では、（復活祭の）祝祭は常に日曜日に行われなければならず、ユダヤ暦の第一の月（アビブ/ニサン）の十四日に最も近い日曜日がその日とされていた。そして、もしその月の十四日が日曜日に当たる場合、その次の日曜日に行うこととされた。」（A.T.ジョーンズ「*預言の大帝国*（*Great Empires of Prophecy*）」213-214 頁）

興味深いことに、聖書によれば、やがて別の獣の勢力が現れ、復興したローマ帝国を象徴する十本の角を持つ獣を世界が礼拝するように「仕向け」（法制化する／施行する）、さらにその「像」（政策）を受け入れるように「作り出し」（施行する）、それを人々に強要することになると述べています（ヨハネの黙示録 13 章参照）。

ヨハネの黙示録 13 章 15～16 節　それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に**刻印**を押させた。

神の安息日のしるし（印と奇跡）が、獣の刻印と同じ場所、すなわち私たちの手と額に記されることを、私たちはすでに見てきたのではないでしょうか。そうであるなら、獣の刻印は神の「例祭と律法」の変更と何らかの関係があるのでしょうか。それでは、ローマ自身の言葉に耳を傾けてみましょう。

「神の律法を覆すのが私たちの権威の**しるし**である。」（エンライト神父「*安息日の歴史*（*History of the Sabbath*）」802 頁）

「もちろん、カトリック教会は、（土曜日から日曜日へ）の変更が自らの行為であったと主張している。そして、その行為こそ、宗教上の事柄における教会の権力と権威の**しるし**なのである。」（ C.F. トーマス、ギボンズ枢機卿の秘書長、「*我らの父祖の信仰*（*Faith of Our Fathers*）」14 頁）

今日、現代のプロテスタントはローマ教会と同じ主張を反映しています。2015 年 4 月、*アメリカ合衆国主日同盟*のデメトリオス・トニアス牧師博士は次のように述べました。

> 「定義上、すべての日曜日は、キリスト者の一致への呼びかけです。なぜなら、この日こそ私たちは主によって主との交わりへと招かれる日だからです。…日曜日をキリスト教的一致のしるしとして十分に理解するためには、私たちは一致についての定義をさらに広げる必要があります。」

カトリックの学者マラキ・マーティンは、教皇について「教皇は、ローマ・カトリック的キリスト教を基盤とするのでなければ、人類は実行可能な地政学的体制を築くうえで確かな希望を持つことはできないと主張している。」と説明しています。（マラキ・マーティン「*この血の鍵（Keys of This Blood）*492 頁）1798 年に権力を失って以来、ローマ教会は、その宗教的・政治的な政策を強化しつつ、全ての教会を結束させるという二重の役割を果たしてきました。教皇は、世界の宗教がいずれか統合されるとしたら、それは「ローマ・カトリックのキリスト教」に基づくものでなければならないと述べているのです。

これは、すべての教義が一つに統合されなければならないという意味ではありませんが、世界の諸宗教が一つの教会の指導者、すなわちローマ教会（教皇制）に目を向けることになることを意味します。そして、その「キリスト教の団結」のしるしが日曜日の神聖さであり、日曜日の神聖さは「ローマ・カトリック的キリスト教」を示しているのです。では、それは、いったい何なのでしょうか。

> 「西方教会を築いた偉大な人物たちは、ほとんどがローマ法の訓練を受けた法律家であった。テルトゥリアヌス、キプリアヌス、アウグスティヌス、そしてグレゴリウス大教皇（彼の著作はラテン教父たちとスコラ学者たちを結ぶ橋渡しとなった）は皆、初期にローマの法律家としての教育を受けていた。その訓練は、神学的であれ教会的であれ、彼らの思考全体を形づくり、方向づけた。彼らは偉大なローマの法律家の

ように、すべての問題を本能的に考えていた。彼らは法律家特有の、厳密な定義を求める傾向を持っていた。また、彼らには、その権威が外面的な制度として表されようと、あるいは霊的真理について正しく考える方法を厳密に定義するものとして表されようと、自らに課せられた第一の責務は**権威への服従を強制すること**であるという法律家的な考え方があった。**西方キリスト教世界のいかなる分派も、キリスト教会書記のこれらローマの法律家たちがかけた影響力から完全に開放されることはできなかったのである。**」（トーマス・リンゼイ「*宗教改革史（A History of the Reformation）*」168 頁）

安息日と日曜日は、それぞれ全く異なる二つの統治体制と、その祭りの体系を示すしるしです。第七日である安息日を第一日である日曜日へと「変更した」という行為が、世界のほとんどの人々の考えの中で、宗教問題における教皇権の権威の「しるし」となっているのであれば、日曜日の神聖性は、「権威への服従を強制するという方法」に従うことへの「標示」や「旗」であると言えるでしょう。一方、安息日は神の御国を指し示しています。その御国は、真理と愛が最高の支配原理となって設計の法則に基づいており、そして人々には、自ら蒔いたものを刈り取る自由が残されています。「罪に至るものには死を、従順には義に至る命を」（ローマの信徒への手紙 6 章 16 節）。日曜日が休息の日となったのは、創造の設計によるのではなく、人間が制定した法律的な決定によるものでした。それは人によって課された規則です。そして、強制された規則は聖さを生み出すのではなく、ただ従属する者を作るだけなのです。

この人間が作りだした強制の仕組みを信じることは、あなたの「額」（あなたの理性の象徴）にその刻印を受けることです。一方、その獣的な方法を実践することは、あなたの「手」（あなたの行いや忠誠の象徴）にその刻印を受けることです。日曜日という旗印が象徴するこの方法を信じず、また実践しない者は死刑にされることになります。しかし世の人々は、それを神の正義が執行されたものだと誤って信じ

ているのです（ヨハネの黙示録 13 章 15 節）。イエスはヨハネによる福音書 16 章 2〜3 節で次のように言われました。「…その時が来る。あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると思うようになる。彼らがこのようなことをするのは、父をも私をも知らないからである。」その時、私たちすべてがイエスの御品性を持ち、「父よ、彼らをお許しください。彼らは自分が何をしているのかわからないのです。」（ルカによる福音書 23 章 34 節）と祈ることができるようでありたいものです。

私たちは、他の誰かを非難しているのではなく、人類全体の一員である**私たち自身**に目を向けていることを強調したいと思います。堕落した状態にある私たちは皆、「策略（欺き）を自分の手（行い）によって成功させ」、また「心の中で（自らを）高ぶらせる」（ダニエル書 8 章 25 節）という小さな角の霊を同じように持っています。キリストが私たちの内に生き、支配していなければ、私たちは他者に対して力や強制、報復を使うことによって、この獣のような敵対的な精神を表してしまいます。そのため私たちは、父なる神の愛を信じなかったことに対して、（人類全体を代表して）集団的な悔い改めを求めます。そして、キリストが無限の代価を払って買い取ってくれた私たちや他の人々への無条件の愛と奉仕の道へと私たちの利己心の道を優しく導き直してくださる中で、父のふところに安らぎを見つけます。罪によって深く傷つけられた私たちの魂を癒すことは、私たちにとって苦しい経験です。しかし、それを完全に全うすることができるのは、神が私たちを愛しておられることを心から信じるときだけなのです。

安息日の設計は、私たちを聖なる者とする唯一の力である神の臨在を受けるための通り道です。それは、安息日だけでなく、日々の生活の中にも及びます。安息日の七の原則は、創造主のかたちと似姿に基づく**生き方**のしるしです。あなたが神のご品性をどのように理解しているかは、天の父との関係をどのように捉えているかに反映されます。あなたにとって神は、規則への服従を要求し、それを破る者には罰を与え、時には命さえ奪う父なのでしょうか。あなたは、神を怒らせな

いために義務として従わなければならないものとして天の父を恐れて生きているのでしょうか。それとも神は、決して変わることのない、決して暴力をふるうことのない父であり、その律法はあなたの肉体的・霊的な健康と幸福のために定められたものであり、常にあなたの重荷や欠点、罪を背負いながら、失われた子供が家に帰り、そのふところで安らぐことを求め続けておられる方なのでしょうか。

> イザヤ書 57 章 19 節　「遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ、わたしは彼をいやそう」と主は言われる。そして私は彼をいやすだろう。

サタンが聖なる祭りを変えようとする理由は明らかです。なぜなら、神の子供たちはこれらの定められた時を通して、自らが神の息子また娘であるという自覚を新たにし、あわれみと許しの確信を得るからです。彼らは、最初の安息日に父なる神が御子に対して示された喜びに入るのです。そして私たちは、キリストのうちで、この霊的な祝福を余すところなく受けるのです。

真夜中の叫び

マタイによる福音書 25 章の十人の乙女のたとえは、恩恵期間が終了する直前における神の民の経験において、重要な役割を果たしています。

> マタイによる福音書 25 章 1〜6 節　そこで天国は、十人の乙女がそれぞれあかりを手にして、花婿を迎えに出て行くのに似ている。その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であった。思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。**夜中に**、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と**叫ぶ声がした**。

賢い乙女たちと愚かな乙女たちの違いは、賢い乙女たちが、ともしびと共に器の中に余分の油を持っていたことです。この油は聖霊の象徴です。賢い乙女たちは、愚かな乙女たちよりも豊かに聖霊を受けていました。では、彼女たちはどのようにしてその聖霊を受けたのでしょ

うか。賢い乙女たちは、太陽の衣をまとって月の上に立っています。彼女たちはキリストの呼びかけに応えるのです。

> マタイによる福音書 11 章 28 節　すべて重荷を負うて苦労している者は、私のもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。

賢い乙女たちは、主が呼ばれるときに応えます。ここに、イエスが人々を招かれた一つの例があります。

> ヨハネによる福音書 7 章 2 節、37～39 節　　時に、ユダヤ人の仮庵の祭が近づいていた。...祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、「だれでもかわく者は、私のところにきて飲むがよい。私を信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」。これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである...

イエスは仮庵の祭りの時期に彼らを招かれました。なぜなら、その時は父なる神が聖霊をより豊かに与えるために定められた時だったからです。ここで改めて強調したいのは、私たちは昼でも夜でも、いつでもキリストのもとに来ることができますが、御霊の促しは特にこれらの定められた時に私たちを招きます。なぜなら、それらは安息日・七の原則に基づく刷新の時だからです。この時期には、神の豊かに注がれる御霊によって、神の律法が私たちの心により深く刻み込まれる時でもあります。また、そのような時は神との関係の中でリズムを整えるもので、私たちの天の父に対する確信と安定、そして信仰をますます深めてくれるのです。

仮庵の祭りに集まっていた人々の中には、イエスの招きを受け入れた者もいれば、拒んだ者もいました（ヨハネによる福音書第 7 章 40～42 節）。「こうして、イエスのことで民衆の間に分裂が生じた。」（43 節）ここで注目したいのは、イエスが「聖書に書かれている通り、その人の内から、**生ける水の川**が流れ出る。」と言われたことです。そして、その言葉が真実であることを、イエスはまさに翌日に示されました。「翌朝早く、再び宮に来られると、民衆はみな御もとに集まって来た。そこでイエスは座って彼らを教えられた。」（ヨハネによる福音書 8 章 2 節）。その時、「律法学者たちとパリサイ人たちは、姦

淫の現場で捕らえられた一人の女をイエスのもとに連れて来て」、律法に関する問題でイエスを試したのです（3 章 6 節）。

聖書には、「しかしイエスは身をかがめ、聞こえないふりをして、指で地面に書いておられた。」と記されています（6 節）。では、仮庵の祭りの時に、その神殿の石畳に積もった塵の上にイエスが書いておられたものの本当の意味は何だったのでしょうか。

> エレミヤ書 17 章 13 節　またイスラエルの望みである主よ、**あなたを捨てる者はみな恥をかき**、あなたを離れる者は**土に名をしるされます**。それは**生ける水の源**である主を捨てたからです。

彼らは、イエスをメシア、すなわち「安息日の主」として受け入れることを拒みました。かつてご自身の指で石の板に律法を書かれたお方（出エジプト記 31 章 18 節）が、今度は、その同じ指をもって神殿の石畳の上に書いておられたのです。

> ヨハネの福音書 8 章 7～11 節　彼らが問い続けるので、イエスは身を起して彼らに言われた、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」。そしてまた身をかがめて、地面に物を書きつづけられた。これを聞くと**自らの良心に責められ**、彼らは年寄から始めて、一人ひとり出て行き、ついに、イエスだけになり、女は中にいたまま残された。 そこでイエスは身を起して女に言われた、「女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はなかったのか」。女は言った、「主よ、だれもございません」。イエスは言われた、「私もあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」。

パリサイ人たちも、その女も、ともに自分の罪を悟らされました。しかし、パリサイ人たちは恥と自己非難を抱えながら立ち去り、イエスが無償で差し出された赦しをまだ受け入れようとはしませんでした。。一方、その女はイエスがどなたであるかを悟りました。そして、イエスからも、その父からも、自分を罪に定める思いがないことを知ったので、彼女は、いと高き方の娘としてキリストの**安らぎ**の中へ入り、罪の鎖から解放されて去って行きました。

罪の自覚は、キリストの創造的な声と、聖なる指を通してもたらされました。ルカは、イエスが次のように語られたと記しています。「しかし、わたしが神の**指**によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところに来たのである。」（ルカによる福音書 11 章 20 節）一方、マタイは次のように記しています。「しかし、私が**神の御霊**によって悪霊どもを追い出しているのなら、神の国はあなたがたのところに来ているのである。」（マタイによる福音書 12 章 28 節）この箇所における「指」は、「霊」を表すヘブライ語の比喩です。私たちはすでに、ヘブライ語では「手」が「働き」を象徴することを見てきました。それならば、「指」は手（働き）の一部であることから、「繊細な働き」を表していると理解できます。指は、手全体よりもさらに正確に一点を指し示し、細かな作業を行うことができるからです。聖霊の働きとは、私たちの心と思いの中で神の律法を「細やかに刻み込む」（指で書く）ことなのです。

> コリントの信徒への手紙二 3 章 3 節　そして、あなたがたは自分自身が、私たちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず**生ける神の霊**によって書かれ、石の板にではなく**人の心の板**に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている。

新しい契約の経験について、神は次のように言われました。

> ヘブライ人への手紙 8 章 10 節　私が、それらの日の後、イスラエルの家と立てようとする契約はこれである、と主が言われる。すなわち、**私の律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつけよう。**こうして、私は彼らの神となり、彼らは私の民となるであろう。

神の律法が私たちの心に書き記されるということは、私たちを聖なる目的のために取り分ける、聖化という細やかな働きです。イエスは、「聖霊の働きはあなたがたをすべての真理へと導いてくれるであろう。」と言われました（ヨハネによる福音書 16 章 12～13 節）。神が言われた約束を成就するために「私は新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。私はまたわが霊をあなたがたの内に置いて、わが**定め**に歩ませ、わが**おきて**を守ってこれを行わせる。」（エゼキエル書 36 章 26～27 節）。このように、神の御霊に満たされることの

自然な結果は、神のすべての戒め、定め、そして裁きと調和して歩むようになることなのです。マラキ書第 3 章は、人々を十分の一献金の原則に導くためにキリスト教会全体で引用されています。しかし、第 4 章に記されている内容は、多くの場合、退けられています。

> マラキ書 4 章 4 節　あなたがたは、わがしもべモーセの**律法**、すなわち私がホレブで、イスラエル全体のために、彼に命じた**定め**と**おきて**とを覚えよ。

この聖句の直後に、私たちは次のように言われています。

> 「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、私は預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これは私が来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。（マラキ書 4 章 5〜6 節）

エリヤの働きは、私たちがモーセの律法を思い起こすときにやって来ます。イエスは、律法から何かを取り除くために来られたのではなく、それを高め、尊び、成就するために来られたと教えられました。

> 私が律法や預言者を廃するために来た、と思ってはならない。廃するためではなく、成就するために来たのである。よく言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。（マタイによる福音書 5 章 17〜18 節）

私たちが今住んでいるこの天と地がなくなるまでは、律法から何一つ取り去られることはありません。また、「まで」という言葉は、その後に律法が消えることを意味しているのではありません。むしろ、それはキリストが再び来られる時までの、人類の歴史を通して律法が存在し続けることを示しているのです。

モーセを通して与えられた律法は、何と素晴らしいのでしょうか。私は、次のように語ったダビデの言葉に心から同意します。

> 幸いなるかな、悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人。彼は主のおきてを喜び、昼も夜もそのおきてを思う。彼は流れのほとりに植えられた木のようで、時節に応じて実を結び、その葉も枯れず、そのなすところは皆栄える。詩篇 1 篇 1〜3 節

主の律法に従って歩むとき、御霊の豊かな注ぎがもたらされ、私たちは神の御霊の川のほとりに植えられた木のようになります。さあ、主と主の戒めが良いものであることを味わい確かめて見てください。

暗闇からの召し出し[1]

神が定められた時のすばらしさと、それがどれだけ私を祝福し、どれほど私の旅路の助けになってきたかについて証したいと思います。

2001 年 9 月 11 日にニューヨークのツインタワーが崩壊してから、3 週間足らず後のことでした。私はオーストラリアのシドニー北部の集会で講演をしていました。その講演で、二つの王国の対照について語りました。神の王国は、キリストを通して天の父との関係によって私たちに価値を与えます。一方、サタンの王国は、個人の権力や地位、そして成果によって価値を生み出そうとします。サタンの堕落とは、神の子としての身分から落ち、無価値感と空しさの循環の中へと落ち込むことであったことを示しました。そして、人類もまた罪に陥ったとき、この無価値感を受け継いだのです。この王国に克服する鍵は、信仰によってイエスの子としての身分に入ることでした。父なる神は、イエスの洗礼の時に、また荒野におけるサタンとの戦いの中で、彼が真に神の子であることを明らかにされました。私たちもまた、「愛する方の内に受け入れられている」（エペソ人への手紙 1 章 6 節）のです。洗礼の際に父が御子に語られた言葉は、信仰によって私たち自身のものともなるのです。

[1] これらの個人的な経験はエイドリアン・エベンズによって語られています

これら一連の考えを引き起こした出来事は何だったのでしょうか 2001年の前半、私はある安息日の朝に散歩をしていました。病気のため、何週間も教会に出席することができずにいました。歩いているうちに、数年前に私の長男が生まれた日のことを思い出し始めました。妻がその子を私の腕に抱かせてくれた時の喜びを、今でも覚えています。その目を見つめながら、私は腕の中のかけがえのない命に心を奪われ、しばらくその場に立ち尽くしていました。その時、私はこう祈りました。*「親愛なる主よ、どうか私と息子の間に何ものも入り込むことがありませんように。そして、私はただ、息子に私という人間を知ってもらいたいだけです。」*その祈りを思い返した瞬間、私は心の中で一つの声を聞きました。*「エイドリアン、それがあなたに対する私の思いなのだ。」*私はその言葉に全く驚かされました。すると私の心の奥底から、抵抗感が湧き上がってきました。*「しかし主よ、どうしてあなたが私のような罪人を愛せるのですか。」*私はその思いに驚かされました。なぜなら、私は罪の赦しのためにイエス・キリストを信じていました。しかし、自分でも気づいていなかった深い疑いが心の奥に潜んでいたのです。天の父は、私の息子を通して、私がどれほど大切な存在であるかを伝えようとしてくださいました。そしてその時、私の内にあった無価値感が表面へと引き出されました。望んでいなかったのに、私は自分でも気づかぬうちに神に対して抵抗している自分に気づいたのです。父の言葉は、私の魂の炎のようでした。その言葉は私の無価値感に真正面から向き合い、それを飲み込もうという勢いでした。この葛藤は数分間続き、ついに私は再び心の中で一つの声を聞きました。*「あなたは、私のあなたへの愛を拒むつもりなのか。」*私は再び驚き、直ちに自分の罪を認め、心の中でこう言いました。*「主よ、私はキリストの犠牲を通して与えられるあなたの恵みを受け入れます。それは到底理解できるものではありませんが、私はそれを受け入れます。」*私の天の父は、私の息子を通して私の存在の核心に触れ、御子を通してご自身の愛を示してくださいました。父は私の無価値感を掘り起こし、私の心をつかまれたのです。そして非常に興味深いことに、父が御子を通して私への喜びを表してくださったのは、まさに安息日のことでした。

しかし、たとえ私がこの自由を味わったとしても、敵は戦わずにあきらめようとはしませんでした。愛の炎が私の無価値感を完全に焼き尽くすには、少し時間が必要だったのです。この新しい気づきは、私の考え方を完全に変え、これまで想像もできなかった道へと私を導きました。キリストにおける神の子としての自由を説くことと、もう一つの王国がどれほど深く自分の心に影響を持っているかを実際に知ることとは、全く別の問題です。こうして私は、自分自身の中で自己のアイデンティティを巡る戦いという形で大きな論争を発見しました。私は二つの王国の間を行き来している自分に気づきました。しかしそのたびに、自分の中にある業績や成果によって価値を得ようとする虚しい考え方が、ますますはっきりと見えるようになっていきました。そして、その誤った王国へと引き戻されるたびに、私は再び命の川のほとりへと来て、あの声を聞くことができたのです。*「あなたは、キリスト・イエスにあって、私の愛する子である。」*私はついに御国への鍵を見つけました。私は、キリストの御子としての身分にあずかることによって、自らの神の子としての身分を受け継いだのです。

キリストを通して真の神の子であると目覚めたことによって、私はイエスが子供たちを祝福された聖書の箇所へと導かれました。自分が真の神の子としての祝福を知ったことで、他の人たちを祝福したいと思うようになりました。

祝福

当時私が牧師をしていたある教会で、私は子供たちを前に呼び寄せ、一人一人に手を置いて祝福しました。私はそれぞれの子供のために祈る前に、心の中でこうつぶやきました。*「主よ、この子に何を語ればいいのでしょうか。」*父なる神が人を通してご自身の祝福を注がれることを理解した時、私は会衆の家族一人ひとりに神の言葉を語るという、自分の果たすべき重要な役割をはっきりと認識するようになりました。私の祈りは、おおよそ次のようなものでした。

「愛する父なる神様、マリオンを与えてくださったことを感謝します。この子は、主イエス・キリストにあって、あなたが喜ばれるあなたの大切な娘です。どうか、この子がいつもあなたの愛を知り、また両親に従う恵みをお与えください。そして、この子が正しいことを常に守る神の女性として成長しますように。主イエス・キリストの御名によって感謝いたします。」

「父なる神様、ステファンを与えてくださったことを感謝いたします。この子は、キリスト・イエスを通して喜ばれる、あなたの愛する子です。どうか、この子が教会の家族から愛されていることを知り、いつも両親を敬い、大切にする心を与えてください。そして、あなたが招かれた神の人へと成長していくことができますように。」

それから、思いついたことをいくつか足して祈りを締めくくりました。翌朝、ある母親から電話がかかってきました。「うちの娘が今朝何と言ったかお分かりですか。娘が『お母さん、わたしって大切な存在なんだよ』と言ったんです。私は『どうしてそう思うの』と聞くと、『だって、牧師がそう言ったから』と答えたんです。私はこれまで何度も娘にそう言ってきましたけど、昨日みたいに心に響いたことはなかったんです。」と言いました。

それは、私にとって人生における決定的な瞬間でした。そのとき、ふと一つの思いが心をよぎりました。*「これでようやく、牧師であるとはどういうことなのかが分かった。」*そして私は、父親、長老、そして牧師に与えられている役割について、少しずつ理解し始めたのです。

ヤコブの手紙 1 章 27 節　父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない。

教会の長老や父親たちの純粋な信仰とは、父のいない人や未亡人を訪ねて、天の父の言葉を伝えることです。彼らに、父なる神はあなたを愛しておりあなたは神にとってかけがえのない大切な存在であるということを伝えることは、彼らに与えられた務めなのです。これこそが、

人をこの世の汚れから守るものです。そして、この祝福の原則こそが、教会の長老に求められる重要な資格の一つの土台となっています。

> テモテへの手紙一 3 章 4〜5 節　自分の家をよく治め、謹厳であって、子供たちを従順な者に育てている人でなければならない。（5）（自分の家を治めることも心得ていない人が、どうして神の教会を預かることができようか。）

もしある男が自分の妻や子どもたちを祝福する方法を知らないのであれば、どのように教会を祝福し、世話することができるでしょうか。アブラハムの子であるということは、全く新しい意味を持つようになりました。

> 創世記 12 章 2〜3 節　私はあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。（3）あなたを祝福する者を私は祝福し、あなたを呪う者を私は呪う。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される。

私の魂の喜びを、父なる神に仕える者として、多くの人々と分かち合いたいと願うようになりました。私が自分自身の受けた祝福を人々にも受けもらうよう呼びかけていくうちに、安息日の時間にはこれらの祝福がより大きいことに気づき始めました。

それから長い年月が過ぎた後、私はこれらの祝祭について学び、それを受け入れるようになりました。そして、この祝福の経験は、それらの時にも起こるのだろうかと考えるようになったのです。

私は仮庵の祭りで話すように招かれました。そして、その仮庵の祭りの期間中に迎えた第七日安息日に、父なる神からの祝福の祈りを受けるために人々を前に出てくるよう招くことにしたのです。それは、まさに祭りの中の祭りでした。安息日そのものが、より大きな仮庵の祭りの中に置かれた祭りだったのです。

聖霊のあふれ出しは驚くべきものでした。それは熱狂的なものではありませんでした。むしろ、人々が祈りを受け、自分たちが父なる神の

愛する子どもであることを聞くために前に出てくる中で、穏やかで優しく、愛に満ちた喜びとして現れました。まさにそれは、特別な安息日でした。ヨハネは、無酵母パンの祭りの期間中の安息日を特別な日と呼んでいます。

> さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、（特にその安息日は大事な日であったから）…ヨハネによる福音書 19 章 31 節

その日が特別な日であるのは、そのような時に神の御霊が豊かに注がれるからです。父なる神が、ご自分の定められた時に私たちを招き、その愛を豊かに注いでくださることを心から賛美します。

確かに、父なる神はいつも私たちを愛しておられ、私たちは、いつでも御言葉を通してその愛を聞くことができることは真実です。それでも、神が定められた特別な時には、私たちは御霊を通して、その愛をより豊かに受けるよう招かれているのです。

私の人生を振り返ってみると、真理に応え、神の御心に従ってより確かな決断した特別な時が幾度もありました。そのような経験の多くが、実は父なる神の定められた時に起こっていたことに、私は後になってから気づきました。

結論

安息日と神の祝祭は、私たちにとって祝福の泉です。それらは、父なる神が御子を通して私たちをご自身のもとへ引き寄せ、その腕の中に抱き、祝福してくださる特別な時なのです。

> ローマ人への手紙 8 章 16 節　御霊みずから、私たちの霊と共に、私たちが神の子であることをあかしして下さる。

この祝福こそが、私たちに神のしるしを与えてくれるものです。私たちは父の御名、すなわち父の御品性によって証印を押されるのです。信仰によって父の腕の中に安らぐとき、私たちは御子イエスのように

なり、すべての恐れが取り除かれていきます。神の御子が父の栄光を拡大して示しておられるように、祝祭もまた安息日の栄光を拡大して示すものなのです。

私たちは、その獣とその像に立ち向かう力を持つでしょう。それらは日曜日に世界が礼拝し、その祝祭を守るよう要求するようになります。しかし、そのような行動を取ることは、祝福の泉と神の印を奪ってしまうことを意味します。それは、私たちを救うために与えられているものを失うことなのです。

安息日と父なる神の祝祭の中にある祝福の泉を、私たちはしっかりとつかもうではありませんか。また、神の御子が私たちの心の中に入って来て、私たちと共に祝宴をし、共にいてくださるよう、その扉を開こうではありませんか。

> ヨハネの黙示録 3 章 20 節　見よ、私は戸の外に立って、たたいている。だれでも私の声を聞いて戸をあけるなら、私はその中にはいって彼と食を共にし、彼もまた私と食を共にするであろう。

祝福の泉

神が定められた時を通して神の安息に入る

イエスが洗礼を受けられた時に父なる神が御子に語られた言葉は、創造後の最初の安息日に御子の上に注がれた祝福を響かせています。父なる神は日ごとに御子を喜び、御子もまた父の前で喜びました。そして安息日に、父は御子の上にその息を吹きかけられ、御子は父の愛の内に新たな力を受けたのです。この親密な父と子の交わりは、永遠に安息日の中に刻み込まれました。それゆえ安息日ごとに、父なる神は御子を受け入れるすべての者にも同じ祝福を与えてくださるのです。

父なる神の御子に対する愛は絶えることがありませんが、その愛は安息日の原則を反映する特定の時に表されます。私たちは、その時に集うことによって、父が御子に抱いておられる喜びの中へと入ります。そして、月の上に立ち、太陽をまとった女の一部となるとき（ヨハネの黙示録 12 章 1 節）、私たちは父の御座から送られる慰めと刷新の時を知るようになるのです。

父なる神は今、私たちをより豊かな安息日の経験へと招いておられます。私たちは、アブラハムの子らとして、キリスト・イエスにあるすべての霊的祝福へと招かれているのです（ガラテヤ人への手紙 3 章 27～29 節）。イエスは私たちに、「見よ、わたしは戸口に立ってたたいている。」そして主は、神が定められた時にその戸をたたかれるのです。あなたは主のために戸を開き、主と共に食卓にあずかるでしょうか。